

のは、黄金である。土砂よりも有効なのは、佐渡の土である。これを食はされ、これをかけられると、士農工商、片つ端がら、ぐいやくぐいの骨なし動物、蛸のやうになつてしまふ。今の世には、斯うした蛸入道が、政海、學海、官海、教育海、宗教海、到る處の海から跳ね出して、輿論の痛棒を喫される。その圖は、滑稽を極めるが、その長い、澤山ある、吸着力の強い足で、世海を濁すには困り入る。

九の二五 西郷南洲の大至誠

◇死ぬる位の事は、相調ひ申候と存じ奉り候。「西郷南洲」

征韓の議、既に決して、愈よ、一大隊の兵を派し、朝鮮政府の罪を問ふことになつた時、これを遮つたのは、西郷南洲である。

『突然の出兵は、宜しくない。名義が立たぬ。先づ、然るべき使節を送つて、談

判を試み、その使節に、無禮を加へるやうであつたら、その時にこそ、斷乎たる處置に出るべきぢや。』今は、まだ、出兵の時期ではない。』といふのである。

『成程!』と、廟議は、忽ち、それと決した。就いては、使節の問題である。南洲は、

『自分が行く。』といひ張つた。これに對して、外務卿副島種臣も、自ら、その任に當らんことを要望し、中には、

『西郷が行つたら、無智な鮮民共は、必らず、これを殺すに相違ない。西郷は、やらぬがよい。』といふ者もあつて、南洲の渡鮮は、實現困難の形勢となつた。

時に、南洲は、書を板垣退助に與へて、その盡力を請うた。一節に曰く、

公然と、使節を差し向けられ候は、暴民は、致す可き儀と相察せられ候に付、何卒、私を遣し下され候處を、伏して、願ひ奉り候。副島君の如く、立派の使節は、出来申さず候へども、死ぬる位の事は、相調ひ申候と存じ奉り候間、宜しく希ひ奉り候。

x

x

x

南洲の南洲たる所以は、その誠の人たるに在つた。「副島君の如く、立派の使節は出来申さず候へども、死ぬる位の事は、相調ひ申候と存じ奉り候。」といふもの、以て、その大至誠を見る事が出来る。

誠は、又た、無我である。「命もいらす、名もいらす、金も、官位もいらす」と（南洲）至情の己むを得ざる所に従つて、専ら、君の爲め、國の爲め、世の爲め人の爲めを思ふもの、これ、誠である。南洲は、這般の誠を以て、君國に仕へた。彼れには、露も、私を營む心がなかつた。身を念ふ心がなかつた。然ればこそ、副島君の如く、立派の使節は、出来申さず候へども、死ぬる位の事は、相調ひ申候と存じ奉り候。」である。

他人は、如何？「副島君の如く、立派な使節は、出来申す」であらう。死ぬなとは、悲しいかな、調ひ申さぬ。維新以來、大政治家の目ある者も、少くはない伊藤、山縣、井上、松方、桂、西園寺の人々は、それである。先に兇刃に斃れた原も、政治が「上手」であつたと聞く。その智略、その手腕は、西郷の上に出るであらう。惜しむらくは、誠の一字に於て、大遺憾がある。

九の二六 三村次郎左衛門の加盟

◇富が集まると人は衰へる。「ゴールドスマス」

赤穂義士の一人三村次郎左衛門は、臺所方の小役人を勤めて、その身分は、極めて微々たるものであつたが、義心、鐵の如く、進んで内蔵助に一味し、討入の夜には、掛矢を揮つて、吉良邸の裏門を打ち破り、奮闘力戦の後、水野家に囚へられ、享年三十有七、切腹して果てた。

次郎左衛門加盟の次第は、内蔵助等五十餘人が、赤穂城内に會して、既に、殉死の議を決し、一同、血判を了して、これより食事といふ時、臺所方として、酒飯を命ぜられ、席上へ出入して、種々、周旋しつゝ、あつた次郎左衛門は、二三の士が、件の盟約書を披見しつゝ、切りに私語してゐる所へ、何氣なく、立ち寄つた。此方は、慌て、その書を押し隠した。次郎左衛門は、きつとなつて、

「何故、然やうの事をなされません。」

「否々、お前たちの知つた事ではない。」との挨拶に、次郎左衛門は、

「これはしたり？ 御連判の趣きは、手前も、存じてをります。この場合、身分の上下を論ずべきではござりますまい。是非、手前も、お差し加へ下されませ。」と、且つ憤り、且つ迫つた。

時に、障子越しに、聲があつて、

「次郎左衛門の申す所、道理ぢや。連判の儀、差し許す。」と指圖したのは、内蔵助である。次郎左衛門は、勝ち誇つた心持ちで、直ちに、名を署し、血を刺してこゝに、一黨に加はつた。

が、何分、卑賤の者である。一同、その眞意を忖りかねて、

何か、心組があるのぢや。今に、尻尾を見はすから。と、眞面目に受け取る者はなかつた。

X X X

赤穂の士中、高祿歴々の輩は、大野九郎兵衛を始め、大概、不義、忘恩に墮し

た。一旦、義盟に加つた者も、後ち、相率ゐて、盟ひに背いた。畢竟、財産に執着して、志を失つたのである。孔子曰く、

振や、慾、焉んぞ剛を得ん。

と。赤穂諸士の事、以て、證するに足る。世間富貴の輩は、十中の八九迄、見かけ倒しである。

能く、この間の消息を知る吾等は、三村次郎左衛門が、その卑賤を以てして、義盟に加はつたことを、不思議としない。

卑賤は、身分の卑賤である。身分の卑賤な者、必らずしも、精神の卑賤な者ではなく、身分の富貴な者、必らずしも、精神の富貴な者ではない。事實は、寧ろその反対に出ることの常なるを證明してゐる。世人の淺近なる、身分に欺かれて精神を徹見せず、彼れを侮り、此れを敬ふのは、まことに、風教上の大災害である。赤穂義士傳を誦する毎に、吾等は、顧みて、今の人に不平なきを得ぬ。

九の二七 摩訶密の七人娘

◇美しき、蒔繪の箱も、薫苞も、そのよしあしは、内にこそ在れ。「古歌」

昔し、天竺に、摩訶密といふ波羅門があつた。金もあり、智恵もあり、國の師となつて、諸人の尊敬を受けてゐたが、性質が慳貪で、佛法を信することをしなかつた。彼れに、七人の娘があつた。天生の美に加へて、金銀の瑤珞で飾り立てたので、それこそ、端正無比であつた。

時に、分儒達といふが、右の波羅門に告げて、

「足下の娘御たちを、國中の人に見せて、若し、醜いといふ者があつたら、手前へ五百金を與へられよ。その代り、醜いといふ者がなかつたら、手前の方から、同額の金を進上しやう。」といつた。波羅門は、「面白い。」と承諾し、早速、娘等を伴れて、旅に出た。

斯くて、九十日の間、國中諸處を巡歴したが、見る人毎に、その美を激賞し、醜いなどいふ者は、一人もなかつた。

最後に、釋尊の許へ行つた。折柄、祇園精舎に在つて、法を説いてゐられた釋尊は、一目見るなり、

「この女の、どこが美しい？ 一つとして、見所がないではないか」と、ひどいことをいはれる。波羅門は、躍鬼となつて、

「世間では、誰れ一人醜いといふ者はありません。して、娘等のどの點が、醜いでせう？」と問ひ返した。釋尊は、冷々然として、

「世間の人は、外貌の美を見て感心する。自分は、身に粉脂を食らず、口に惡を説かず、意に惡を思はぬのを、美人とするぞ。」とお言葉！ 波羅門は、大恥ぢを搔いた上に、分儒達の爲めに、五百金をせしめられ、

泣き面に蜂。「日本俚諺」

の、さんざんな目に遇つた。

×

×

×

容貌の美、必らずしも、賤しむべきではない。殊に、女として、容貌を氣にし外見を飾りたがるのは、殆んど、その天性に出で、これを咎めるのは、無理である。たゞ、内心の、容貌に勝つて貴いことを忘れ、外見を事として、精神の修省を困却する者があるならば、それは、女の淺慮といふもの、釋尊ならぬ吾等と雖も、決して、それを取らないであらう。

まことに、それは「淺慮」である。心理學者は、心身兩者の關係の、極めて、密接したものであることを説く。中庸に所謂る、

中に誠なれば、外に形はる。

の理で、内心は、必らず、外貌に影響し、醜い心には、醜い容貌があり、

「妾は、美人よ。」と已惚れた心には、鼻の邊りに、高慢がぶら下つて、あたら、美人を臺無なしにしてしまふ。眞の美心術が、美顔術であること知らず、外貌を事として止むのは、眞に、淺慮の至りである。

淺慮は、女の常ながら、當今、男の癖に、この淺慮を學ぶ者の多いのは、何うしたことか。

九の二八 次郎左衛門と内藏助

◇人生、意氣に感ず。功名、誰れか復た論ぜん。「魏徵」。

大石内藏助殿、己の四月十六日、遠林寺に御越成され候て、夜七つ時に、私儀を御居間へ召寄せられ、御申成され候は、其方事、家中人多き内に、祿輕き者の儀に候處、親より相勤申候厚恩を感じ、必死の志、儀、承届、さてく、家中に侍も多く、其外、御恩澤の者共數多之れ有り候處、左様成義は申に及ばず、結句、身の爲に見苦敷體、言語に及ばず候。然處、其方忠節ひとへに、志深く候事、神以、拙者心底も恥敷ほどに孝候。存寄の通にも相叶ひ候は、其方義は、何卒、惠遣申度由、吳々、御申成され候。承届、誠に輕き私儀に御座候處、御捨成されず、唯今の御意、辱き次第に感じ候へば、涙ぐみ、御返事も申に及ばず候。同五月十八日、領内の帳面、引き渡相濟、唯今まで。首尾よ

く相勤められ候奉行、小役人、其外輕き者まで、内藏助殿、御禮の爲、魚類の御料理御申付、相濟申候て後、侍中までは、御居間にて、一人づゝ、御禮之れ有り、金子等遣され候。其外の面々は、書院にて、一執一同に御祝ひ成され候よし、田中清兵衛殿、披露の上、申渡され候。私儀は、侍竝に、御居間にて、御傍へとくと御呼び成され候て、御申候は、其方事一人にて、何廉、大勢の世話、その上、唯今まで、晝夜の勤務、一々見届拙者に於ても、満足申事に候。何卒、取續き候様に致度候へども、唯今の拙者事に候間、寸志までに候。兎角、いかやう致候てなりとも、取續き見申様にと御申し、御手づから、金子下され候。右、御申聞の趣、身に餘り、忝存、直に御禮申上難く、間瀬久太夫殿を以て、御禮申し上げ候。(三村次郎左衛門)

これは、これ、三村次郎左衛門が、知人に與へて、心事を明した、書中の二三節である。内藏助が、この奇特の忠臣を、如何に深く愛護したか。次郎左衛門がこれに對して、如何に厚く感激したかは、この書、これを窺ふに足る。次郎左衛

門が、一舉に加はつたのは、天生の義心に由ることながら、爾後の約二個年間を通じて、志を改めず、忠誠を挺んでたのは、蓋し、内藏助に對する感激の然らしむる所であつたのである。「人生、意氣に感ず。功名、誰れか復た論ぜん。」といふのが、次郎左衛門の心術であつたのである。

人を感激させることは、難かしい。心にもない甘言や、爲めこする所のある恩恵を以てして、人を感激させることは出來ぬ。無我、無私、専ら相手の爲めを思ふ至誠のみが、能く、人を感激させるに足る。

人に感激することも難かしい。利害に敏感な者は、他人の好意に鈍感なのを常とする。今の人は、正しく、それである。諺に、

恩を知らざる者は、鬼畜の如し。

といふが、今の人は、父母の恩、主人の恩、朋友の恩、他人の恩、何人の恩にも、感激しないで、臆面もなく、忘恩の擧に出る。恩人をして、

落ちぶれて、袖に涙のかゝる時、人の心の、奥ぞ知らるゝ。の悲歌あらしめて、平氣である。彼等は、徹頭徹尾、物質的に出來てゐる。利

己的に出来てゐる。他人の好意は、以て、その心を動かすに足らぬのである。

九の二九 公子荆善く家を理む

◇士にして、居を懐はゞ、以て、士と爲すに足らず。「孔子」

衛の大夫公子荆といふ人は、家を持つた始め、少々、家財の聚まつたのを見て

「苟か合まつた。」といった。

次いで、稍や備はると、

「苟か完はつた。」といった。

最後に、富んに整ふと、

「苟か美しい。」といった。常に、苟かを、忘れなかつた。

公子は、これを評して、

衛の公子荆、善く、室に居れり。

といひ、その家の理め方を賞めた。どの點が、善かつたか。

といふに、「苟か」は、假初である。組略の意である。即ち、深くは、心を勞

しないのである。公子荆は、家に無頓着であつたわけではなかつた、といつて、

深くは心を勞せず、家財、諸道具の類、その整ふが儘に整へて、速く整へやうと

か、無理に立派にしやうとかはしなかつた「合」から「完」、次いで「美」といふ

やうに、自然の成行に任せて置いた。その點が、善かつたのである。

何事も、自然でなければならぬ。人爲の無理にかゝつて、速く事をしやうとす

ると、大概は、失敗に終る。家を理める、身を修める、一官衛、一公署、一學校

一會社から、大きく一國を治める迄、皆、同斷である。

□教育は、紳士を創造し、讀書は、良友を創造し、反省は、完璧の人を造る。

ロ
ツ
ク

九の三〇 青山侯の士の豪放不羈

◇ふらくくと、暮すやうでも、瓢箪の、胸の邊りに、締め括りあり。「古歌」

丹後宮津青山侯の士某といふは、豪俠放逸、入つては、斗米の蓄へなく、出でては、輿馬の設けなく、妻もなく、妾もなければ、子もなくて、たゞ一人、明し暮し、衣服、調度の類も、片つ端から酒に代へ、起きては飲み、臥ては飲み、酔つて泥の如く、人を見ること塵芥の如く、物を物ともしない痴者であつたが、遂に、その不行跡を罪せられて、所領、家財を召され、宮津を追放せられた。乃で、役人等が、その邸へ臨んで、家財を書き上げるのに、廣き家の中、あるものとしては、疊四枚、筵三四枚、蒲團一つ、小鍋と釜の破れたの、徳利と茶碗が三つ四つ、外に、下駄が一足あるけれど、片々で揃はない、といふ惨めさ！こゝに不思議は、戸棚一つ、厳しく、錠が下してある。雨が漏ると見えて、上

に古合羽を覆ひ、その合羽も破れて、更に、竹の皮の笠を載せた具合が、たゞではないので、

「これは、如何に？」と、錠を押し切り、開けて見ると、藍皮絨の具足一領、二尺五寸の刀一腰、誰れの作とは判らぬが、新たに砥を出た如きものがある。その傍には、金三十金、袱紗に包んで添へたなど、一同、肝を消して言葉なく、急ぎ歸つて、候に申し上げた。

候も、大に驚かれ、四方に人を馳せて、呼び返さうとされたが、行方が知れない、一人、

「心得のよい人ぢやから、多分、江戸へ志したのであらう。」と、東海道を追はせると、果して、草津の驛で追ひつくことが出来、さまざまにいい拵へて、連れ戻つた。候は、本領を返した上に、加増を賜ひ、その嗜みを褒められた。後々は人々、某の武藝の程を知つて、持て囃したとか、

「志」は「之」である。心の「之く」所、向ふ所である。心が、一方に向へば、

他方は、疎そかにならざるを得ぬ。孔子曰く、士、道に志して、悪衣、悪食を恥づる者は、未だ與に議るに足らず。と、心が、道に向つてゐる以上、衣食を疎かにするのは、當然の結果で、必ずしも、悪衣、悪食を好むわけではない。道を憂へながら、同時に、貧を憂ふることは出来ぬ。神に事へながら、併せて、金に事へることは出来ぬ。凡そ、一藝に専らなる者が、名利を餘所にし、禮節に拘はらず、世事に無頓着で、言行往々、人の意表に出で、奇に亘る所以のもの、これが爲めである。人は、目して奇人とする。或ひは、

「家業を怠つて、年中、ぶらぶらしてゐる。瓢箪のお化け見たやうだ。」と譏る者もある。瓢箪にも、胸の邊りに、締め括りがある。彼れにも、奪ふべからざる志がある。志は、人間の締め括りである。人間、志があればよい。名利を他所にし、乃至、世事に無頓着な事、多くいふに足らぬ。

一〇の一 火中の蛇

◇固く汝の事業を守れ。「ジヨンソン」

蛇の尾、頭に向つて、

「お前は、何時も、先に立つて歩く、後に喰つてばかりゐる俺は、随分、馬鹿々々しいわけだ。今日からは、俺が先に立つから。」といひ出した。頭は、その心得違ひを論して、

「俺が、先に立つのも、お前が、後につくのも、皆これ、天理だ、天命だ、各自、天命には順はなきやならない。」と告げ、その儘、出かけやうとすると、尾は、大きに立腹して。



「よしよし、お前が、その氣なら、俺にも、了間がある。」と、突如、路傍の木に
巻きついてしまった。

頭は、困り果て、

「お前は、眞實、解らないね。仕方がない。ぢや、先に立つて、歩いて見るさ。」
「然うか。それなら歩いてやらう。」と、どんどん、歩き出した。けれど、尾には
眼がない。

「盲くら滅法、無闇に歩くその危さ！ 頭が、はらはらして、

「危い！ 危い！」といふ中から、火の中へ飛び込んだ。哀れなるかな！ 頭も
尾も、眞つ黒々に焼けてしまつて、何かの薬になつたとか。

X X X

農、工、商、或ひは軍人、或ひは官吏と、人には、それぞれ、その職業がある
何の爲めの職業か、酒屋の主人は、

「生活の爲めに、酒を賣る。」といふ。下駄屋の職人は、

「生活の爲めに、下駄を造る。」といふ。けれど、酒屋の主人、下駄屋の主人、人

毎に、職業を有して、その職業に従事することが、やがて、社會の進歩、萬人の
福祉に貢献する所以であることを思へば、單に、一人の生活の爲めの職業ではあ
るまい。併せて、社會の爲め、萬人の爲めの職業でなければならぬ。これを、天
命と見て、誤まらぬであらう。人が、その職業に従事するのは、天の命する所
よつて以て、社會の爲め、萬人の爲めに、その義務を盡すのである。

であるから、何人も、何等の職業に従事するのでなければならぬ。

「俺には、巨萬の財産がある。優に、利息で食つて行かれる。商賣なんか、要
るものか。」とばかり、無爲に日を送る者は、社會、萬人に對する義務を缺くのであ
つて、まことに、天の罪人である。

職業にも、色々ある。主として、頭を働かす職業もあれば、腕力を使ふ職業も
ある。目の職業、手先の職業、船頭は、海で働き、農夫は、野で働き、樵夫は、
山で働く、軍人は、戰場に出ることを職業とし、官吏は、國家の公僕たることを
職業とする。職業の種類は、唯に、千種、萬種のみではない。

斯く、職業に色々あるのは、所謂、分業なるもので、人毎に、分業の一つを

受け持ち、協同的に努力して、社會の進歩を促し、萬人の幸福を計るのである。社會、萬人の爲め、といふ點に於ては、何れの職業も、同様に必要であり、同様に價值がある。その間、貴賤の差もなく、尊卑の別はない。總理大臣となつて、國政を料理するのも、分業の一を受け持つて、社會に貢献するのである。勞働者もあつて、工場に働くのも、分業の一つを受け持つて、萬人に貢献するのである。彼れも貢献、此れも貢献、彼れも貴い。此れも貴い。

のみならず、亦た、天命に従ふのである。職業に従事することが、天命であるならば、分業の一つを受け持つことも、當然、天命でなければならぬ。

職業に貴賤がなくて、而も、天命であるならば、人は、宜しく、職業に好き嫌ひをいはず、現に従事しつゝある職業には、我が天職であるとし、全力を盡してこれに勤勉すべきである。これ、天命を順受し、併せて、社會、萬人に對する、己れの義務を完くする所以である。職業に貴賤はない。人に尊卑があるならば、斯くの如き人こそ、最も尊敬さるべき人である。

たつてゐる農夫は、座つてゐる紳士よりも高い。「英國俚諺」

といふではないか。

一〇の二 婦人に七去あり

◇男女、室に入るは、人の大倫なり。「禮記」

「若し、女の道に背き、去らるゝ時は、一生の耻なり。されば、婦人に七去とて惡しき事七あり。一には、嬖に順はざる女は、去るべし。二には、子なき女は、去るべし。是れ妻を娶るは、子孫相續のためなればなり。然れども、婦人の心正しく、行儀よくして、妬む心なくば、去らずとも、同姓の子を養ふべし。或ひは妾に子あらば、妻に子なくとも、去るに及ばず。三には、淫亂なれば去る。四には、悋氣深ければ去る。五には癩病などの惡しき病あれば去る。六には多言にして、慎みなく、物言ひ過すは、親類とも仲惡しくなり、家亂るゝものなれば、去るべし。七には、物を盗む心あるは去る。右の七去は、皆、聖人の教へなり。(女

これこそ、女を物品扱ひにするもの、今時、こんな規則を信奉する者はないであらう。各條「去る」の二字を去つて、單に、女の心得として見れば、婢に順はざる、淫亂なる、悖氣深き、多言に過ぎる、盜む心あるの類、皆、戒しめなければならぬが、直ちに、以て、離婚の原因となるのは、如何？

人、聖人に非ざるよりは、誰れか、過ちなからん。過つて能く改む。善、これより大なるはなし。「左傳」

妻は、自ら改めるがよい。夫は、妻を敬へ導いて、善に遷らしめるがよい。離縁云々は、その上の問題であらう。

殊に、「子なき女は、去るべし。」といふなどは、亂暴、驚くの外はない。

□予の心志、予の勉力、予の自治は、母の薰陶により得たるものなり。

ナ
ボ
レ
オ
ン

一〇の三 從容死に就く忠興の

◇柔、能く剛を制す。「三略」

石田三成は、西國の諸侯を語らつて、兵を興す時、その妻子を大阪城へ入れて質としやうとした。細川忠興の妻明智氏は傳につけられた、河喜多石見、稻留伊賀、小笠原正齊の三人を呼んで、

「妾が、こゝを出ることは、思ひも寄らぬ。城中へ取り籠められるのは、恥辱ぢや。よく斷られよ。肯き容れられずば、これを限りと覺悟しやう。」と告げた。正齊は、

「殿には、東國へ御下向の砌、後で、何か、事があつたら、正齊の計ひで、武將の恥ぢを晒さぬやうにせよ、と仰せ置かれました。敵が、奪ひ取りに参りましたら、その時、御覺悟をなされませ。」と答へた。

所へ、石田方の使ひがあつて、再三、

「疾く、城へお入りなされよ。」といつて来た。固く執つて、動かないでゐると、今度は、軍兵五百餘りを差し向け、玉造口の邸を取り圍んで、

「何故、城中へは入られぬ？ 可厭とならば、亂入して、奪ひ取りますぞ。」と迫つた、女たちは、慌て騒ぎ、泣き悲しんだ。

けれど、忠興の妻は、

「斯うなるのは、覺悟の前ぢや。正齊、介錯して給れ。生きてゐる中、見えなだ人たちに、死んでの後も、顔を見られるのは、よくあるまい。」と、覆面を打ちかけ、括り袴着け、刀を抜いて、胸に突き立てた。正齊は、薙刀を揮つて介錯した。

そして、その場で腹搔き切り、後を追はうとすると、正齊の小姓が、飛んで来て、

「奥方と同じ室で御自害なされては、後の誹りがござりませう。」と注意した。正齊は、頷いて、

「餘りのお傷はしさに、つひ、忘れてゐた。」といふと、障子の外へ走り出て、家に火をかけ、焔々たる炎の中で、石見共々、切腹して果てた。

醜かつたは、伊賀である。彼れは、光秀から附けられた者で、第一番に、主人に殉すべきであつたが、人込みに紛れて、どこへか落ち失せ、永く士人の指揮を受けた。

X X X

女は、纖弱いもの、優しいもの、物事に驚き易く、動もすれば、度を失して、慌て騒ぎ、泣き喚くもの、結局、男に縋るもの、獨立して世を渡る力のないものと斯ういふことになつてゐる。

一應、そこにこそ、女の本領、女の強味があるやうにも思はれる。女は、柔を以て立ち、男は、剛を立つ。而も、

柔、能く、剛を制し、弱、能く、強を制す。「三略」
で、賢女は、皆、
柔和な妻は、その夫を指揮する。「英國俚諺」

といふことを知つてゐる。

然し、柔和といふこと、物事に驚き易いといふことは、違ひはせぬか。從順といふことと、獨立の能を缺くといふこととは、違ひはせぬか。

それは、確かに違ふ。繊弱い中にも、毅然たる所がある。優しい中にも、剛健な所がある。滅多に騒がず、驚かず、時宜次第、獨立して判断し、獨立して、家を調へ、子を護り、世の荒波を乗り切つて行ける程の意氣、氣概、しつかりしたものを持つてゐる——これではなければならぬ。下田女史の歌に、

降る雪に、撓むと見えて、折れぬこそ、柳の枝の、力なりけれ。

この力があるのでなければならぬ。

即ち、細川忠興の妻の如くであればよい。威武に屈せず、暴力に従はずして去從、節あり、進退、度あり、一死、以て、武人の妻たる面目を保つた。而も、死に臨んで、臆せず、怯まず、少しも、取り亂所がなかつたなど、有髻、六尺の男子をして、後へに撞若たらしむるに足る。柔裡の剛、弱中の強、千古の烈女といつてよい。

これ、殆んど、婦人の例を逸出してゐる。繊弱いのを常とする女、忠興の妻は何の邊から、斯くの如きの剛強を得たか。遺傳であらう。家庭教育もあらう。彼の女自身の修養こそ、その最大原因であつたべく想像される。崑崙の鐵は、鼓鐺次第、化して金となる。人間萬事、たゞ、修養如何に在るのである。

一〇の四 黒田長政の殿様藝

◇何程の、薬師の慈悲も、叶ふまで、我れと諫めを、聞かぬ聲は、「古歌」

黒田長政が、老臣を相手の宴席で、謡曲を唱へた。一同、口を極めて譽めちぎ

り、
「まことに、面白く承はりました」と諛辭を呈した中に、毛利左近は、一膝、

乗り出して、
「私も、嘗つて、謡曲を學びまして、多少の心得はござりまする。けれど、只今

のは、甚はだ未熟で、全然、調に合ひませぬ。要するに、殿様藝といふのでござりませう。」と貶し、一座を見合して、

「君が驕つて、臣が諂ふのは、國家の不祥事でござる。」と嗜めた。長政は、大に悟る所があり、名刀を興へて、左近の直言を賞し、その後は、再び、謠曲を口にしなかつた。

X X X
人を諫めることは、難かしい、自分に對して、生殺、興奪の權を持つてゐる人を諫めることは、殊に難かしい。動もすると、怒りを買ひ、命迄も、召されるやうなことが出來する、徳川家康は、

直諫の功は、一番槍に優る。

といつた。直諫の危険は、一番槍の危険よりも、一層の危険で、それこそ、命がけの仕事であつたのである。たゞ、慾のない者のみが、これを爲すに堪へる。諫めを容れることも、難かしい。衆人の前で諫め、無遠慮な諫めを容れることは、殊に難かしい。たゞ、善を好み、賢を愛する者のみが、これを爲すに堪へ

る。
毛利左近は、能く諫めた。黒田長政は、能く容れた。黒田主従の事は、正しく一般主従の法とするに足る。賢明の主と忠誠の従とが相違つて、繁昌しない家はない。法るべきである。學ぶべきである。

一〇の五 所望の鬚剃り役

◇神人は、功なし。「莊子」

或る王様、戰場で、數多の敵に取りかこまれ、既に御危急といふ折から、一人の家來が現はれて、獅子奮迅の勢ひ勇ましく、敵を追ひ散し、王様を救ひ出した。王様のお喜びは、譬ふるに物なく、戦が済んで後ち、右の家來を呼び出して、その功を賞め、

「褒美は、其方の望み次第ぢや。遠慮なく申し出よ」との御説である。

すると、家來は、恐る恐る、頭を擡けて、
『今後、王様が、お鬚をお剃り遊ばす際は、何卒、私にお命じ下されますやう。』と、妙な願ひをする。

『それが所望か。』

『はい、然やうで……是非、お願ひでござりまする。』

『いと易いことぢや。』とあつて、即時、鬚剃り役を仰せつけられた。

聞く者は、その功績の著るしいに、比して、望みの小さいことに呆れた。

この家來、憐れむべき愚人としたものか、歎すべき賢者としたものか。一般には、これを愚人とするであらう。誰れか愚人の、却つて、賢者たらざるを知らんやである。

自分に、何等かの功があれば、必らず、賞を思ふ。他人の爲めに、多少でも、勞する所があれば、必らず、報酬を思ふ。これ、人情の常ではあるが、聖人、君子の固く戒しむる所で、孔子は、

仁者は、難きを先にし、獲ることを後にす。仁と謂ふべし。

と説き、

孟之反、伐らず、奔りて殿し、將に、門に入らんとす。その馬に乗ちて曰く、敢へて後るゝに非ず。馬、進まさるなり。

といつた行き方をよしとした。顔回は、

願はくは、善に伐ることなく、勞を施なりとすることなけん。

といつてゐる。これが、節儉の心である。功に賞を求め、勞に報酬を望むのは到底、小人の情でなければならぬ。

といふのが、賞と報酬とは、自然に與へらるべきものである。與へると否とは他者の領分内にあつて、我が力の及ばない所である。我れは、たゞ、我が領分の内を守り、我が力の及ぶ所に於て、力を盡せばよい。功を立て、勞を加ふればよい。これが、天命を知る者の態度である。天の事は、天に任せる。自然の事は、自然に任せる。それには、一切、干渉しない。所謂、

人事を盡して、天命を俟つ。「孔子」

人の爲すべき所、そして、爲し得る所は、これ以外にない、と心得る——處世の要道、こゝに在つて、能く、こゝに自得する所があれば、聖賢、我れを距る。甚はだ遠くはない。

賞といふか。賞は、功の中に在る。報酬といふか。報酬は、勞の中に在る。親に孝を盡す者、親を安んずることが、出来れば、自分の苦心は、報ひられたわけで、それが、即ち、證である。君に忠を盡す者、君を幸福にすることが出来れば、自分の願ひは、満されたわけで、それが、即ち、報酬である。他に求める必要はない。世の爲め、人の爲めにする一切の善が、皆、これである。賞と、報酬と、善そのものの中に在つて、他に求める必要はない。

善の報酬を善以外に求める者は、報酬の爲めに、善を行ふ。これ、商人の善である。打算の善である。實は、善でも何でもない。強ひて、善といふならば、取りも直さず、偽善である。

又た、善に限りが出来る。報酬を計量して、善に手加減を加へる。
又た、行ひに表裏が出来る。

又た、往々、失望がある。失望は、まだしも、不平となり、不満となり、憤懣となり、憤怒となり、怨嗟となり、怨恨となつて、あたら、善が、悪と變る。

であるから、賞を思はない所に、眞の功があり、報酬を念はない所に、眞の勞がある。更に進んで、功を忘れて、功を功ともせず、勞を勞とせず、無我又た無心、たい、己れの本然、自然の儘を行つて、それが、功となり、勞となるのは、老莊の所謂至人、神人、聖人の神である。莊子曰く、

至人は己れなく、神人は、功なく、聖人は、名なし。

老子曰く、

萬物、作りて辭せず、生じて有せず、爲して恃まず、功成して居らず。それたい、居らず。こゝを以て去らず。

又た曰く、

聖人は、その身を後にして、身、先んじ、その身を外にして、身、存す。その私なきを以てや、故に、能く、私を成す。
然り、無心は、賞を失はない所以である。無我は、私を成す所以である。世

間、小慾の輩は、鑑みなければならぬ。

一〇の六 朝三暮四と朝四暮三

◇繪にかいた、餅は食はれず、世の中は、誠でなけりや、間には合はぬぞ。

「古歌」

「宋に、狙公といふ者あり。狙を愛して、之れを養ひ、群を爲す。能く、狙の意を解し、狙、亦た、公の心を得たり。其の家、口を損して、狙の欲に充つ、俄かにして乏しく、將に、其の食を限らんとす。衆狙の、已れに馴れざらんことを恐れ、先づ、之れを誑きて曰く、若に茅を與へん。朝、三にして、暮、四にせば、足らんと、衆狙、皆、起ちて怒る。俄かにして曰く、若に茅を與へん。朝、四にして、暮三にせば、足らんかと。衆狙、皆、伏して喜ぶ。物の能鄙を以て相籠すること、皆、猶ほ、此くの如し。聖人の智を以て、群愚

を籠すること、亦た、狙公の智を以て、衆狙を籠するが如し。名實、虧けずして其をして喜怒せしむ。」(列子)

X X X

蟻は、甘きに就き、蠅は、臭きに就き、そして、小人は、皆、利に就く。小人を使つて、我が用を爲さしむるの道は、たゞ、與ふるに利を以てするに在る。が、我が金には、限りがある。彼れの欲するが儘に與へることは、出来得べくもない。

こゝに於てか、巧みに、人を使ふ者に、その與へ方に注意し、最も少く與へて最も多く満足させる爲めに、最初、給料を減じて置いて、不時に増額したり、功勞、勤勉を賞したり、病氣を見かけて、見舞金を贈つたり、年末の手当を多くしたりする。與へる者は、損はなく、受ける者に、喜びがある。狙公が猿に用ひたと同一の籠絡手段である。

けれど、西郷南州は、人を籠絡して、陰に、事を謀る者は、よし、其の事を成し得るとも、慧眼よ

り之を見れば、醜狀、著るしきものだ。人に推すに、公平、至誠を以てせよ公平、至誠ならざれば、英雄の心は、決して、攪られぬものなり。といつてゐる。籠絡手段は、猿に向つて用ふべきもので、人に向つて用ふべきものではない。

一〇の七 子路と隱者

◇その身を潔くせんと欲して、大倫を亂る。「子路」

孔子に従いて、諸國を巡遊しつゝあつた子路は、一日、後れて孔子を見失ひ、困却の折柄、杖の先に竹器をかけ、肩にして行く老人に遇ふと、

「若しや、夫子を見られなんだか。」と問うた。老人は、

「體を働かせることもなく、五穀の區別を知らないで、何が夫子かい？」とばかり、杖を立て、島の草を除る様子に、子路は、隱者と見て取つて、手を拱いて

これに敬意を表した。

最早、夕刻でもあつたのか、老人は、子路を自宅へ案内し、雞を殺し、集を拵つて、饗應した上に、その二人の子を呼んで、子路に見えさせた。

子路は、一夜をそこに明して、翌日は、孔子に會ふことが出来た。その話をすると、孔子は、

「成程、隱者に相違はない。今一度、行つて見よ。」と命じた。子路が、引き返して見ると、老人は、他出して、不在であつた。

乃で、子路は、留守の子供等に向つて、慨然としていつた。蓋し、孔子の言葉を傳へ、二子から、老人に話させやうとしたのである。

仕へざれば、義なし。

人、苟くも、一息の存する限りは、大にしては、國家、同胞の爲めに、小にしては、一家、隣人の爲めに、盡す所がなくてはならぬ。これ、義である。仕へて道を行ふのも、同斷の趣意に出て、亦た、義である。這般の義を外にして、自ら世外の人となるのは、一種の利己的行爲とすべく、吾れ孔丘の取らない所であ

る。

長幼の節、廢すべからず。

然ればこそ、二子をして、子路に見えしめたのではないか。

君臣の義、これを如何ぞ、それ、これを廢せん。

彼れを知つて、これを知らない、老人の眞意は、甚はだ、解するに苦しむ。

その身を潔くせんと欲して、大偷を亂る。

老人は、正しく、これである。多くの隱者が、皆、これである。彼等は、國家社會に對する、人間當然の義務を忘れてゐる。痛嘆に堪へぬ。

君子の仕ふるは、その義を行はんと成り。道の行はれざるは、已に、これを
知れり。

道の行はれると否とは、時に在る。これを理由に、君臣の義を廢し、國家、社
會對する義務を缺くなどは、我が志ではない。

孔子は、名利を賤しんだ。これ、隱者の心持ちである。たゞ、孔子は、この程

度に止まらなかつた。更に進んで、國家、社會の爲めに、道を行はんとすること
によつて、隱者以上に出た。吾等の所謂る、世外の情を以て、世内の事に従つた
のである。孔子の孔子たる所以である。
然らば、世外の情、亦た、貴ばなければならぬ。今の政治家は、世外の情なく
して、世内の事に従ふ者である。その行ふ所に、私が多く、一身の榮辱一黨の
利害を念ふの餘り、往々、國利民福を忘れやうとする嫌ひがあるのは、その因、
蓋し、こゝに在らう。厭ふべきは、今の政治家である。彼等は寧ろ、政治屋であ
る。

一〇の八 別所小三郎一死部下に代る

◇君子、仁を去つて焉んぞ名を成さん。「孔子」

別所小三郎は、毛利氏の爲めに、備中三木城を守つたが、勢ひ熾まり、敵將秀

吉と議して、部下の助命を條件に、愈よ、城を明け渡すことになる、自ら、妻
子を刺し、

今はたい、恨みもあらず、諸人の、命にかはる、我が身と思へば。

との辭世を遺して、心靜かに世を去つた。時に、天正八年正月十六日、年二
十三といふ。

X X X

天命は、自然である。自然は、人に賦するに、種族保存の本能を以てした。人
をして、種族の爲めに——家族、子孫、朋友、知人、一郷、一地方、社會、國家
の爲めに、献身せしめんが爲めである。こゝに、天命がある。天命には、従はな
ければならぬ。眼中、一身あつて、他人なし、といった生活法は、天命に背く。
論語には、

志士仁人は、生を求めて、以て、仁を害することなし。身を殺して、以て、
仁を成すことあり。

と見えてゐる。志士仁人は、餘人に非ず。天命に従ふ人をいふのである。

人間、皆死ぬ。同じ死ぬ命ならば、立派に死にたい、天命に従つて死ぬにも、
別所小三郎の如くであるならば、則ち、立派な死に方であらう。彼れ、亦た、
志士仁人であつた。

一〇の九 懶惰漢の望み

◇飽食、煖衣、逸居して、教へなければ、禽獸に近し。「孟子」

或る懶惰漢、貧極まつて、將に、餓死にも及ばんとする時、近所の人、見舞
ひに来て、

『働いたらよからうに。』といふと、

『それがねえ……それよりも、私を墓地へ持つて行つて埋けて下さらんか。』

『生理?……そ、そんな事が出来るものか。今、米二三升持つて來た。當分の命
繋ぎにはならう。まあ、よく考へるさ。』と、歸らうとする。

「一寸……米は、白米かね？」

「否、玄米だ。」

「其乃は困る。玄米では、搗くのが厄介だ。それよりも、墓がいゝ。何卒、生埋に願ひます。」とせがんで、大に、相手を手古摺らせた。

生きるとは、働くことである。金のあるに任せて、酒色に耽り、榮華を事とし、懶惰に日を送る者は、その生、その死、彼れは、生きながら、死んでゐるのである。眞實に死んだ方がよい。話の懶惰漢は、墓地へと急いだ。墓地へ急いで、生埋になれば、世界の米を食ひ潰さないだけ、「飽食、煖衣、逸居して」、世間の風俗を亂し、國民思想を悪化させる、華族、富豪の懶惰漢に優る。

起てる農夫は、坐せる紳士よりも高し、「西洋俚諺」といふものは、然りとては、困つた御連中ではある。

一〇の一〇 杉田玄白の七不可

◇昨日の非は、恨悔すべからず。明日、是、念慮す可し。「杉田玄白」

昨日の非は、恨悔す可からず。明日、是れ、念慮すべし。飲むと食ふとは、度を過す可からず。正物に非ざれば、苟も、食はず。無事の時は、薬を服す可からず。壯實なるを頼みて、房事を過す可からず。動作を勤めて、安を好む可からず。(杉田玄白)

「昨日の非は、恨悔す可からず。」——恨悔しても、及ばない。爲めに、心を勞し、思を費すのは、愚である。衛生に宜しくない。たゞ、後日の参考に供し得る程度に、一瞥を與へて置けばよい。

「明日、是、念慮す可し。」——所謂る念慮も、一寸でよい。深く念慮するのは、

無駄、である。一寸先は闇の世に、明日の事を心配したとて、何にならう？

あて事と越中禪は、前から外れる。「日本俚諺」

片つ端から、外れてしまふ。といつて、極端な今日主義でも困るから、これも或る程度に於て、「明日、是、念慮す可し。」として置く。

一〇の一 福島正則國除かる

◇國を憂ひて、家を忘れ、軀を殞して、難を濟ふ。「文選」

廣島城主福島正則に對して、國除の令を發すると同時に、幕府は、安藤對馬守重信を受城使とし、隣境の諸侯にも、それぞれ、その應援方を命じた。

この事が、廣島へ聞えると、長臣福島丹波は、早速、一藩の士を召集して、「殿から預け置かるゝこの城、普通には、從ひ、將軍公の仰せにもせよ、渡すことは出来ぬ。けれど、備後殿のお爲めも思はにやならぬ。それを思つて、寧ろ、

速かに明け渡した方かよくはあるまいか。」と提議した。備後守は、正則の嗣子である。

上月文左衛門は、膝を進めて、

「人は、如何にもあれ、拙者、本丸を預かる上は、命のあらん限り、斷じて、人には渡されぬ。」と頑張つた。丹波は、稍や不満けであつた。

時に、村上彦右衛門が、帳面を出して、

「以上兩説の中、何れへ同心さるゝか、別々に、判形せられよ。」と、一同に告げた。

酒井主膳は、丹波の甥である。座を起ち、鎌田主殿を呼んで、

「何と思はるゝ？ 丹波は、拙者の伯父ぢやあるけれど、上月のいふ所が、道理ではないか。」

「拙者も、同感ぢや。」といふので、二人共、上月側へ判形した。一同、これに倣つて、衆議一決、愈よ、籠城といふことになつた。

文左衛門は、丹波に向つて、

「評定は、定まつた、貴殿は、妻子を本丸へ入れらるゝか」と、問うた。丹波は、

「無論の事よ。」と、早速、妻子を本丸へ入れた。他の諸士も、我れ先にと、妻子を本丸へ入れた。

左右する中、對馬守を始め、城受取の諸將が、迫つて來た。丹波は、吉村又右衛門、水野治郎右衛門の二人を使者として、

「仰せの旨は、謹しんで承はりまする。然りながら、主君お預けのこの城、證據の書狀もなくしてお渡し申すこと、人々の存寄も、思ひやられます。次に、當領國へお入りの儀、田舎の若者共、無禮の恐れがござりまする。何卒、領國をお避け下されませぬやう。」といひ送つた。受城使からは、

「左衛門大夫殿は、程遠い、伏見にをらるゝ、備後殿の書翰では、如何？」と問うて來た。丹波等は、

「父子に相違はござりませぬが、備後守の領國でも城でもござらねば、その言葉は、用ふるに足りませぬ。」と謝絶した。受城使等は、少からず、面喰ひの體であ

つた。

すると、恰度、そこへ正則の書面が來た。丹波は、城の大手でこれを受け取つた。

「殿のお指圖とあらば、已むを得ぬ。」といふので、城は、形の如くに明け渡され、一藩の士は、それぞれ、縁故を求めて、廣島を立ち退いた。

これより先き、國除と聞いて、逸早く、暇を乞うた者が、三十人程あつた。これを狭間潜りといつた。妻子を本丸へ入れた者を、諸籠りといひ、妻子を外に置き、單身、城に入つた者を、片籠りといひ、後ち、京都の耳塚に札を建て、三種に分けて、姓名を書き出した。狭間潜りの面々は、誰れ相手にする者なく、餓死にも及んだといふ。

福島の諸臣は、死を以て、城を守り、命に代へて、義を重んじた。今の世渡り上手は、奸を以て、財を守り、義に代へて、利を重んずる。人の心といふもの、斯くも、變れば變るものか。

福島ふくしまの狭間せま潜ひそりは、世人せいじんの指弾しゅだんに、天下てんか、身を置くに處ところなく、或あるひは、餓死がしする者ものさへあつた。今の背信者はいしんしゃは、才子さいし、利巧者りこうものと崇あがめられ、大概たいがい、成功せいこうして、金かね持ちになる。世の中よのちうといふもの、斯かくも、變かはれば變かはるものか。が、變かはらない者は、天てんである。人ひと、多くして、天てんに勝かち、天てん、定ままつて、人ひとに勝かつ。恐おそれて躍おそるべきである。

一〇の二二 大石内藏助と愛妾輕女

◇大行たいかうば、細瑾さいきんを顧かへみず。「獎吟」

大石おおいし内藏助のちゆうすけは、山科やまの隱棲いんせい以來いらい、毎日まいにちのやうに、京きやうの島原しまはら、伏見ふしの撞木町しゅちきまちに遊あそんで、尙なほ足たらず。時ときには、若衆わかしゅ瀬川竹之丞せがわのたけのぢやうといふを連れ、墨染すみぞめの法衣ころもに、一升徳しやうとく利りを提さげ、祇園邊ぎげんへ浮うれ込み、酔ようては、大道だうだうに打うつ倒たふれて、正體しやうたいがないなど

痴態ちたい、狂態きやうたい お話はなしにならないやうな、不行跡ふかうせきの限かぎりを盡つくした。さては、

大石おおいし輕かろうて張拔石はりぬけいし。

赤穂あかほで悪わるうて阿呆浪人あほうらうじん。

などの落首らくしゆさへあつたが、大石おおいしの眞意しんいは、斯かくして、敵てきの間諜かんぢやうを欺あそび、これに油斷ゆだんさせやうとしたのである。

一舉いっぎよの期迫きせまつて、内藏助のちゆうすけは、手元てもとに長男松之丞ちやうなんまつのぢやう——後の主税ちゆうしゆ——のみを置き、妻子さいしを妻つまの實家但馬豊岡たじまとよおかの家老石塚源五兵衛いしづかげんごべゑに預あづかけた。そして、相變あひかはらず酒色しゆしよくに耽かひり、相變あひかはらず遊興いゆうきやうを事こととし、復讐ふくしやうの事ことなど、てんで、念頭ねんとうにないもの、やうに振ふるる舞まつた。敵てきの間諜かんぢやうは、油斷ゆだんして來きた。吉良上野介きちらじやうのけも、大分おほいぶん、警戒けいがいを弛ゆるめ出した。内藏助のちゆうすけは、こゝぞといつたやうに、愈いよよ益ますす、遊治いゆうぢ、放蕩はうたうに身みを持もつた。

内藏助のちゆうすけの一族いっしゆに、進藤源四郎しんどうげんしやうといふがあつた。夙つとに、一黨いっとうに加くははつて、衆しゆの推おし服ふくする所ところとなり、後のちち、盟めいひに背そむいた一人ひとりである。内藏助のちゆうすけのこの體ていを見みると。

「畢竟ひつぎやう、獨身どくしんでゐるからぢや」と、京都きやうと一條寺町いちじょうじまちの邊あたり、二文字屋次郎右衛門もんじややじらゑもんの娘むすめ、お輕かろ、艶名えんめい、世よに隠かくれのないのを取り持もつて、内藏助のちゆうすけにあてがはうとした。

内蔵助は内心、笑止に堪へなかつたであらう。けれど、これも方便、面白い位の考へで、表面、満足げに持て做し、早速、お輕を山科へ迎へ取つた。

爾來、内蔵助は、淺からず、お輕を寵愛し、東下の期も、略ほ決して、これを二文字屋へ返す時には、數々、餞別の品を取らせなどした。

のみならず、發足の前夜になると、態々、訪ねて行つて、別れを告げた。二文字屋の一家は、内蔵助の東下を訝かりながらも、深く、名残を惜しみ、盃を侷めて、首途を祝した。お輕は、始終、打ち萎れて、

燈暗くしては、數行、虞氏の涙……

と微吟した。内蔵助は、聞き咎めて、

『めでたい首途に、涙とは如何？ それぞれ、日頃、手馴れの一曲を……』と所望した。お輕は、琴を引き寄せて、

七尺の屏風は、躍るとも、よも躡えじ。羅綾の袂は、引かば、などか、殺れざらん。

と歌ひ、爪音に殺聲を籠めて。弾じ去つた。内蔵助は、頷いて、

『珍らしや、今の一曲！ お輕、然らばぢや。』と起つて、當時の京居、梅林院へと立ち歸り、一夜明くれば、元祿十五年十月七日、同志以下、約十人を従へて、京都を發足した。

X X X

内蔵助が、お輕を妾としたのは、敵を欺く詭計であつた。お輕を方便に用ひたのである。人間の百行、人を方便に用ひる位い、惡むべきはない。今日の道德眼を以てすれば、内蔵助は、容すべからざる大罪惡を犯したのである。

然るに、世間、これを咎める者のないのは、如何？ それが君國を思ふ大義に出で、一身の肉慾を貪つたわけではないからである。君の爲め、國の爲めといふやうな場合には、小節に拘々たるわけには行かぬ。即ち「大功は、細瑾を顧みず。」である。

まことに、大功は、細瑾を顧みない。但し、所謂大功は、眞に、大功でなければならぬ。又た、他に取るべき手段、方法のない時でなければならぬ。他に方法がなし、功といふ程の功でないのに、「細瑾を顧みず。」と稱して、道德を無視し

常識外れの事をするのは、避くべきに属する。況んや、何等、功を思ふの心なくして、この語を弄し、酒色にこれ耽つて、豪傑がるが如きは、言語同断、以ての外としなければならぬ。

内藏助は、大義の爲めに、己むなく、輕女を方便に用ひた。他人の女を犠牲にした。こゝに顧みる所があつたか、平生、これを愛し、これを响はることを忘れなかつた。

輕女は、賢い女であつた。然ればこそ、偉人内藏助の側室として、その愛を得ることが出来たのである。容貌のみが、縦し、花を欺いて美しくとも、心が愚かで、はしたないのは、到底、英雄の心を惹くには足らぬ。内藏助に輕女があり、輕女に内藏助があつたのは、佳人、才子の好遭遇、義士傳中の好艶話、世間多情の人をして、垂涎、措く能はざらしむるものである。

□志士仁人は、生を求めて、以て仁を、害することなし、身を殺して、以て、仁を成すことあり。

孔子

一〇の二三 仙人の指

◇榮を貪れば、萬乗も、猶ほ、足るなく、歩を退くれば、一瓢も、還た、餘りあり。「南茶翁」

赤松子に弟子入して、最早、仙人の術を學び卒へた男が、山から下りると、圖らず昔の朋友に出遇つた。朋友は、相も變らず貧乏と見えて、ほろほろの衣服である。可哀さうに思つて、

「何か、進上したいが、今、山から出て来たばかりで、持ち合せがない。今日はこれで我慢し給へ。」といひながら路傍の石を指さした。不思議や、石は、忽ち、黄金となる。朋友は、かぶりを振つて、

「同じ呉れるなら、今少し、大きいのがいゝね。」
『では……』と、お宮の前の大鳥居を指さした、鳥居は、やはり、黄金となつ

た。

『これなら、よからう？』

『今少し……』

『まだか。ぢや、君の注文をいひ給へ。』といふと、

『實はね、僕は、君のその指が欲しいので……』との言葉に、流石の仙人も、一驚した。

x

x

x

物を食つて、飽かうとすれば、何時迄経つても、飽き得る期はない。慾を寡くして、足ることを知れば、富貴は、眼前、足下に在る。

これを湯に入るに譬へる。立つてゐて、膝限りしかない湯も、坐れば、腹迄は浸る。横に臥れば、全身を浴し得て、餘りがある。飽くと飽かぬとは、心に在つて、物の多少に關はらぬ。浸る浸らぬは、體の置き方に在つて、湯の多少は與からぬ。貪るのは、立つてゐるのである。足ることを知るのは、横に臥るのである。

古人曰く、

足ることを知らざる者は、富むと雖も貧し。

と、有財餓鬼たり、金を持つた貧乏人たることを屑しとしない者は、致富の道の、知足の二字に在ることを知つて、己れの慾を制すべきである。

但し、足ることを知るとは、金儲けを廢めるの意ではない、ちつと、現場所に立ち停つたきり、足を運ばないことではない。普通に儲けて、普通に使ひ、普通に歩いて、普通に休むのを、貪るとはいはぬ、一日、五圓の儲けを普通とし、十里の道を普通とする者が、暴利をかけて、三十圓づつ儲けたり、晝夜兼行、五十里づつ走つたりするのが、貪るのである。足ることを知らないのである。その結果は、知れてゐる。暴利取締令でやられるか、心臓麻痺で斃れるか、先づ、其邊であらう。

□貪慾は、悉皆を得んと求めて、却つて、悉皆を失ふ。

ラ、フランテース

101の14 畢竟老と死

◇この日、己に過ぐ。命は、則はち、隨ひて滅す。少水の魚の如し。これ、何の樂みかある。「出曜經」

「蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ、南北に走る。貴きあり、賤しきあり。老いたるあり。若きあり。行く處あり、歸る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。營む所何事ぞや。生を貪り、利を求めて、止む時なし。身を養ひて、何事をか待つ。期する所、たゞ、老と死とに在り。その來ること速かにして、念々の間に留まらず。これを待つ間、何の樂みかあらん。惑へる者は、これを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚かなる人は、亦た、これを悲しむ。常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり。」兼好法師

×

×

×

「身を養ひて、何事をか待つ。期する所、たゞ、老と死とに在り。」——斯くて、名利の貪るに足りないことを思ひ、妻子を蓄へず、家業を營まず、浮世を餘所に於て、飲食、起臥、適にこれ安んじ、風月を伴侶として、詩歌、俳諧、己れの欲する所に從ふのは、蓋し、達人の事であらう。が、何となく、物足らぬ。これを名利の俗人に比すれば、優ること萬々であらう。以て、吾等の理想とするには、まだまだ、大分の距離がある。

人は、天命を知らなければならぬ。天は、人に賦するに、自分の爲めなる、個體保存の本能と、他人の爲めなる、種族保存の本能とを以てした。生れた赤子は直ぐ、乳房を索ねる。これ、個體保存の本能である。親は、その子の爲めに苦勞し、父母、兄弟、夫から、廣く、朋友、他人に及んで、大なり、小なり、憂ふる所がある。これ、種族保存の本能である。この間、天命がある。自然の意圖がある。

即ち、天の見る所、自然の見る所、人は、自分一身の爲めにのみ生きるのではなくて、併せて、他人の爲め、社會の爲めに生きるのである。

人が、妻子を蓄へ家業を営むのは、その、自覺してゐると否とに關はらず、他人の爲め、社會の爲めの行爲と見るべく、由來を質せば、種族保存の本能に在つて、即ち、天命の存する所である。自然の意圖の伏する所である。

世人の大部分は、天命を知らずして、天命に従つてゐる。自然の意圖を解せずして、自然の意圖に任せてゐる。それはよい。たゞ、従ひ方が、完全でない。任せ方が、充分でない。更に進んで、これを知つて、これに従ひ、これを解して、これに任せる時、初めて、完全なる従ひ方があり、充分なる任せ方がある。古來志士と稱せられ、仁人と呼ばれる人は、皆、それであつたのである。

吾等は、古への達人が、名利を貧る心のなかつた點には敬服する。社會の無用人であつたことに遺憾がある。達人、決して、理想の人ではない。我々は、更に進んで、孔子の語に、

身を殺して仁を成す。

とある、志士、仁人を理想として、事に精神修養に従はなければならぬ。

一〇の一五 僧寂室弟子に教ふ

◇人知らぬ、心に恥ぢよ、恥ぢてこそ、終に恥ぢなき、身ともなるらめ。

「室直清」

足利氏の季に、寂室といふ僧があつた。若い頃、明へ渡つて修業し、歸ると、高德の名があり、僧侶の歸依する者も多かつた。或る時、その徒に向つて、

「愚僧に一つの秘訣がある。緊要の事ぢやけれど、今、お前たちに授けるから、決して忘れるな」と告げ弟子等が、耳を澄すと、

「他ではない。お前たち、毎朝、起きたらば、先づ、自分の頭を撫で、袈裟を顧みて、さて、心に念じ、口にもいふがよい、「自分は、これ、釋迦文佛の法孫ぢや縦ひ、命を殞すとも、比丘の模範を失ふまい」と。これ、第一の覺悟ぢや。所謂秘訣とは、この事ぢや。」と諭したとか。

X X X

世間、恥を知らない者は、滅多にないが、多くは、恥ぢ方を誤まつてゐる。恥づべからざるを恥ぢて、恥づべきを恥ぢない。リヱキー曰く、恥づるの最下等は、節儉、貧困を恥づるに在る。

と、これ、恥づべからざるを恥ぢるのである。恥づべからざるを恥ぢない彼等は、恥づべきを恥ぢないで、己れの不義、不徳、不人情、無學、無勢なことには一向、平氣の平左衛門である。

又た、世間に恥ぢて、自ら恥ぢない。人に恥ぢて、「人知らぬ心」に恥ぢない。世間に恥ぢ、人に恥ぢるのは、己れの名聞を思ふのである。一種の慾に出るのである。以て、良心の有無を證するに足らぬ。これを道德の上から見て、多くの價値はない。自ら恥ぢ、人知らぬ心に恥ぢ、良心に恥ぢるに至つて、眞に恥ぢるのである。

僧寂室が、弟子等に教へた所は、畢竟、心に恥ぢよ、といふのである。「自分はこれ、釋迦文佛の法孫ぢや。平生、心に思ふ所は、如何？ 身に行ふ所は、如何

と願みる時、今の圓頂黒衣の人、果して、能く、自ら恥ぢずにするられるか。

剃りたきは、心の中の、みだれ髪。つむりの上は、とにもかくにも。「古歌」の情なきを得るか。

僧侶のみの事ではない。自分は、これ、陛下の大臣、自分は、これ、國家の干城、自分は、これ、皇室の藩屏、自分は、これ、國民の選良、自分は宗教家、教育者、信用を重んずべき商人、總じては、萬物の靈長たる人間である。名は、確かに、それであるが、實は、如何？ 世に、獸でない獸はないが、人でない人は數多ある。自分も、その仲間内ではあるまいか、と願みる時、内心、恥ぢる所がなければ幸ひである。

人は、恥ぢを知らなければならぬ。恥を知つて、初め、悔いることがあり、悔いることがあつて、初めて、過ちを改め、善に遷り、然る後ち、恥のない人となることが出来る。而も、それは、恥づべきを恥ぢるのでなければならぬ。己れの心に恥ぢるのでなければならぬ。世間の人、十中の八九迄は、恥ぢ方を間違へてゐる。畢竟、恥を知らないのである。

100の一六 家康と名の残し方

◇彼れを毀る者、雷同鴉噪し、此れを稱する者、火燎波駭す。「段基通語」

關ヶ原役の後ち、或る日、山岡道阿彌、前羽半入などいふ者が、主人家康の前
で種々、閑話しながら、

「何か、世に珍らしい事をして置かれましたら、永くお名前も残るでござりませ
う。太閤も、大佛を造られました。」と申し上げた。家康は

「成程、大佛は、未の世迄も残る。自然、太閤の名も、残るであらう。けれど、
自分は、一方の事に名を残さうとは思はぬ。たゞ、天下の爲めになるべき事を工
夫して、後嗣に貽す外はない。その方が、大佛を幾つ造るよりも、勝らうではな
いかといつて、二人の淺慮を一笑した。

X X X

名は、「残る」ものであつて、「残す」ものではない。名を残さんが爲めに、橋の
ない河に橋を架けたり、道のない場所に道を築いたりすることは、世間によく見
る例であるが、以ての外の僻事で、道徳上、三文の價値のあるわけではない。形を
仁人にして、心を商人にするのである。名を公共に假りて、私を營むのである。
その陋劣なる心情は、甚はだ、唾棄すべきに屬する。

名利の二つは、古來、聖賢の異口同音に戒しむる所である。シセロ曰く、
名は、徳の報酬である。

と。卒然として、これを聞けば、名は貴きに似てゐるけれど、それは、名が貴
いではなくて、徳が貴いのである。程伊川が、

學者、須らく、これ、實を務むべし。名に近づくを要せず。方に、これ、名
に近づくに意あらば、これ、僞なり。

といひ、周廉溪が、

實、勝つは、善なり。名、勝つは、恥なり。故に、君子の、徳を進め、業を
修むるや、慈々として、實の勝つを務むるを息めず。

といへる、即はち、定論を見てよい。

生前の名、既に斯くの如くである。死後の名が、何事ならう。譽められて喜ぶ者、今、將た、何の處にかある？ 譽める者も、死んで行く。

身後の名残りて、更に益なし。兼好法師。

まことに、死後、百年の名は、生前、一杯の酒にも如かぬ。

畢竟、名を残さうとするのは、執着の爲である。達士のしない所である。豊太

閣の大佛建立が、若し、名を残さんの心に出たとすれば、この英雄、存外、未練

な男であつた。それとも、英雄の穉氣とでもいふか。

100の一七 方角違ひの答へ

◇餅屋は餅屋「日本俚諺」

夏の一日、悪戯盛りの河童小僧が二人、村の小川で水泳ぎをして、川の底から

一握りの髪の毛を發見した。

「何だらう？」

「妙なもののね。」

「あ、判つた。こりや、君、サンタクロースの鬚だぜ。」と一人がいふと、

「否、鬚の毛だよ。」と一人がいふ。議論の容易に決しない所で、問題を川上に棲

む仙人の許へ持ち込んだ。仙人は、米と胡麻とを取つて、口に含み、嚼み碎いて

掌に載せて、

「見ろよ、斯うすると、孔雀の糞のやうぢやないか。」と、方角違ひのことをいつ

て、折角の問ひには答へなかつた。

小人にも、問題がある。何うしたらば、十千萬長者になられやうか。何うしたらば、家の身上を、孫子の末迄、持ち續けられやうか。何うしたらば、名を天下に揚げる事が出来やうか。何うしたらば、世間に頭角を露はし得やうか。何うしたらば、上官の氣に入つて、立身が出来やうか。何うしたらば、紳士、金持ち

に見えやうか——要するに、名利の二、これ、小人の問題である。

この問題を提けて、聖賢の人々に質す。彼等は、何と答へるだらう？ 曰く、

君子は、道を憂へて、貧を憂へず。「孔子」

金持ちになる方法など、自分は、曾つて、考へたことがない。曰く、

金玉、堂を満つれば、これを能く守ることなし。「老子」

持つから失ふ。身上を持ち續ける方法は、身上を造らないに在る。曰く、

語を寄す、鐘昇の家、虚名、定めて益なけん。「寒山詩」

名など、何うでもよいではないか。曰く、聖人は、その身を後にして、身、先

んじ、その身を外にして、身、存す。「老子」

世間に頭角が露はしたくば、先づ、頭角を露はしたいといふ、その心を捨てる

が第一！ 曰く、

澹臺滅明といふ者あり。行くに、徑に由らず。公事に非されが、未だ嘗つて

偃の室に至らず。「子游」

暮夜、上官の門に伺候して、細君や子供に迄、おべつかを使ひ、それによつて

立身出世した所で、餘り、名譽でもあるまいではないか。曰く、

服装は、紳士を造らず。「英國俚諺」

見かけ倒しは、眞つ平！ 眞つ平！——答へは、大概、此邊であらう。

餅が欲しくば、餅屋へ行け。聖人、君子に、名利の問題は、不向きである。方

角違ひの間ひに對しては方角違ひの答へを與へるの外はない。

一〇の一八 朋友の道

◇善を責むるは朋友の道なり。「王陽明」

「善を責むるは、朋友の道なり、然らば、須らく、忠告して、之れを善導すべし
其の忠愛を悉し、其の婉曲を致し、彼れをして、之れを聞きて、従ふべく、之れ
を釋きて、改むべからしむ。感ずる所あつて、怒る所なければ、乃はち、善を爲
さんのみ。若し、先づ、其の過惡を暴白し、痛毀、極誣すれば、容る、所なから

しむ。彼、將に、其の愧憤、憤恨の心を發し、降つて以て、相従はんと欲すと雖も、勢ひ、能はざる所あり。是れ、之れを激して、惡を爲さしむるなり。故に、凡そ、人の短を許き、人の陰私を攻發して、以て、直を沾る者は、皆、以て、善を責むといふべからず。然りと雖も、我れ、是れを以て人に施すは、不可なるも人、是れを以て、諸れを我れに加へ、我れの失を攻むる者は、皆、我が師なり。樂受して、心、之れを感じざるべけんや。』

X X X

忠告の仕方は、仕方ではなくして、心である。所謂の心は、誠である。至情である。同情である。親切である。衷心、朋友の爲めを思つてする忠告ならば、如何なる朋友も、これを喜び、これに感じて、改過、遷善の實を示すであらう。親切のない忠告は、寧ろ、口を噤むに如かぬ。

まこと、今の朋友は、口を噤んで、忠告しない。善を責め合ふといふことがない。朋友の過ちがあつても、知らぬ顔の半兵衛を極めてゐる。甚はだしきは、油を濺ぎ、薪を添へて、益す、過ちを重ねさせようとする。親切がないのである。

稀れに、忠告することあつても、それは、親切からの忠告ではない。忠告に託して、嘲るのである。譏るのである。罵るのである。前に、啣む所があつて、その鬱憤を晴すのである。その忠告、勿論、効果のあらうわけはない。

一〇の一九 畫家大雅堂の奇行

◇人に畸なる者は、天に作し。「莊子」

畫家として有名な池大雅、諱は無名、字は貸成、通稱を秋平といひ、書畫には往々九霞山人と署した。京都の人である。爲人肅敬、榮辱の爲めに心を動かさず禮法に簡單で、往くべくして往かず、答ふべくして答へず、而も、これを義に顧みるに、未だ曾つて、失ふ所なく、所予、得失に於て、恬如としてゐた。

平生の行事には、人の意表に出るものが多く、世に奇人の目があつた。今、奇行の一二をいふと、漢法の山水をやり出した頃、扇子に畫いて、近江、美濃、尾

張の國々を賣り歩いたが、怪しんで、誰れも、買ふ者がなかつた。空しく、京都へ歸へらうとして、近江八景の一つ、瀬田の長橋を渡りかゝると、全部、湖水へ投じて、

「斯うして、龍王を祭るのぢや。」と、平氣なものであつた。

或る時、大阪へ行くのに、筆を忘れて、家を出た。妻の玉瀾が、それと氣ついて、跡を追ひ、建仁寺の前で追ひついて、筆を渡すと、大雅は、押し戴いて、「どこのお方か、よく、拾つてくれました。」と、禮をいひ、その儘、大阪へ向つた。

その夫にして、この妻あり、玉瀾も、やはり、變つた女で、口も利かず、にこりともせず、始終無言で、引き取つた。

人は、超脱しなければ、死生存亡、榮枯窮達、利害得失、毀譽褒貶、一切の運命から超脱し、更には、無意味なる習慣、禮法から超脱して、何物にも束縛されず、何事にも拘泥しないものをよしとする。これ、眞の生活である。

自由といふか。物に束縛せらるゝ者に、何の自由があらうか。

人格といふか。自由がないのは、人格がないのである。奴隸に人格はない。

獨立といふか。運命からの獨立、これ、喫緊の獨立ではないか。

道德といふか。道德は、自由を有し、人格を具へ、獨立の能ある人、初めて、

これを行ふに堪へる。物に束縛されての『世の爲め』が、何程の世の爲めであらう？ 事に拘泥しての『人の爲め』は、大概、知れたものである。そこに、窮屈な藩離がついてゐる。

幸福といふか。物と共に變化する幸福は、裏面に、不幸を持つてゐる。

平和といふか。物に俟つ所の平和は、物によつて動搖する。不安極まる平和で

ある。あてになつたものではない。超脱して、何物にも束縛されず、何事にも拘泥しない時にのみ、人は、一切を自然に託し、成行に任せて、何時、如何なる場合にも、騒がず、驚かず、嘆かず、悲まず、晏如としてゐることが出来る。平和といふか。それは、斯くの如き平和でなければならぬ。

孔子曰く、

君子は、坦かにして、蕩々たり。小人は、長へに、戚々たり。
と。君子の蕩々たる所以は、超脱の爲め、小人の戚々たる所以は、束縛の爲めである。

古來、奇人の名ある人が、少くない。奇人、必らずしも、超脱した人ではないが、超脱した人は、大概、奇人である。人が、營利に汲々たる時、彼れは、利害の外に在る。人が、習慣に拘々たる時、彼れはたゞ、その欲する所に従ふ。人の喜ぶ時、彼れは嘖ひ人の怒る時、彼れは和ぎ、人の哀しむ時、彼れは罵り、人の樂しむ時、彼れは嘯く。彼れの行き方は、人のそれと、全然違ふ。彼れは西、人は東、人は北、彼れは南と、心も違へば、行ひも違ふ。人の眼には、狂人とも見えるであらう。變りものとも見えるであらう。成程、彼れは、奇人である。

『奇』は、『正』に對するの名である。世間の多數を正として、これを尺度に、彼れを計れば、彼れは、確かに、奇人である。若し、彼れを正人とせんか、世間の多數こそ、却つて、これ、奇人でなければならぬ。莊子曰く、『人に畸なる者は、天に倅し。』と、公平無私なる天の眼には、奇人が、寧ろ、正人であつて、正人が

反對に、奇人であるかも知れぬ。

一〇の二〇 大雅權貴に屈せず

◇首を俛し、耳を帖れ、尾を揺かして、憐みを乞ふは、我が志に非ず。

「韓愈」

大雅、或る年、江戸に下つて某侯の邸内なる知人に寄食した。その滯留中、
『今日は、六月八日、祇園の社の御興洗ひぢや。その眞似をして遊ぼう。』と、紙で人形を作り、火を灯し、囃しながら、ぐるぐる、邸内を廻つた。

すると、侯の世子が、聞きつけられ、是非、見たいとのことで。

『早々、持參致せ。』と、使者が、横柄にいつて來た。大雅は、囃しに紛らかして聞えない風でゐた。世子は、

『何故、見せぬ?』と、大きにむづがられ、再三、使者が來て、催促した。大雅

は、その都度、

「はい、只今……」とのみ、答へてゐるが、やがて、故意と、火を失して、焼いてしまひ、

「おや、飛んだことをした。最初、祇園の神へと思ひついた御輿ぢやから、人に見せることを、神様が、お嫌ひなされたのに相違はない。」と、冷然としてゐた。

この事、圖らず、祟りを爲し、憎まれて、屋敷を追はれることになつたが、大雅は、一向、平氣なもので、立退の命を聞くと、

「はい、ツ。」と一笑し、

「いや、然うもあろかい。」とばかり、さつさと引揚げてしまつた。

又た、或る時、或る金持ちから、繪を頼まれた。月日を経て果さず、催促のあつる毎に、

「近日に……」と、同じ答へを繰り返してゐた。或る日、小僧が、やつて來るとやはり、出來てゐない。小僧は、ひどく憤慨して、門を出ながら、

「この死繪師め、幾度となく、無駄足をさせやがる。已惚れなのか、無精なのか

抑も、人を馬鹿にしてゐるのか。」と罵つた。それが、耳へ入ると、大雅は、急に呼び留めて、

「お前の言葉は、道理ぢや。俺が悪かつた。」と謝し、早速、筆を執つて、畫債を済した。

×

×

×

超脱し切つてゐた大雅は、その眼中に、富貴と貧賤との區別がなかつた。従つて、諸侯の世子と商家の丁稚との區別もなかつた。諸侯の世子の命なればとて、特に奉じなければならぬ理由を知らなかつた。世子の使者の横柄面の前に、特に頭を下げなければならぬわけを知らなかつた。たゞ、道理の、當然、従ははれなければならぬことを知つてゐた。

斯くて、大雅は、世子の求めを斥けて、丁稚の言分を通させた。

□けふまでも あればあるかの 世の中に

ゆめのうちにも ゆめを見るかな

10の111 この榮螺十六文

◇見るも聞くも、いふも動くも、何もかも、せう事なしに、あつち任せぢや。

「古歌」

榮螺といふ貝は、至つて丈夫な貝で、その上、蓋をさへ持つてゐる。鯛や鱸が羨ましがつて、

「貴公は、實に、用心堅固で、安心な身の上だ。」

「何、お前方の思ふ程でもないさ。然し、斯うしてゐれば、まんざら、難儀なこともないよ。」と卑下自慢の折から、さんぶといふ水音！ 榮螺はびつくり、蓋をして、

「はて、今のは、何だらう？ 網か知ら？ 針か知ら？ だから、要害が肝腎だ それにしても、鯛や鱸は、何うしたかな、多分、漁られたことだらう。可哀さう

に……」と思ふ中、大分時刻が移り、戸外も静かになつた様子。

「もうよからう」と、蓋を開けると、何となく勝手が違ふ。

「これは？……」と驚き、よくよく見れば、「この榮螺十六文」——、あはれ、正札つきになつてゐた。

X X X

人、皆、恃む所がある。財産を恃み、官位を恃み、門閥を恃み、諺に、

親の光は七光

といふ。その親の光を恃み、學問を恃み、才智を恃み、父子、兄弟、夫婦、朋友、互ひに相恃み、藝妓は、最負の旦那を恃み。商人は、大方の眷顧を恃み、恃み恃んで、

「これなら大丈夫！」と安心してゐるが、その恃むに足りないことは、榮螺の貝の恃むに足りない一般である。

世界に、何一つ、恃みになるものはない。他人、勿論、恃みにならぬ。

自ら恃め「ラ、フォンテーヌ」

といふけれど、自分とても、恃みにならぬ。恃みにならないものを持めば、「この榮螺十六文」——榮螺の失敗を繰り返さうも知れぬ。險香至極！

恃むの險香を知つて、何物、何事をも恃まない者は、一切を擧げて、自然に託し、自然の赴く所に任せて、復た、私意を用ひない。彼れは、無我である。無心である。吉が來れば、吉を迎へ、凶が來れば、凶を迎へる。乃至、生が來れば、生を迎へ、死が來れば、死を迎へ、

ともかくも、あなた任せの、年の暮。
生るゝも、死ぬるも彼方、任せなり。あつち任せぢや、あつち任せぢや。

「古歌」

とばかり、逆はうとせぬ。その心たる、極めて香氣、極めて平和、極めて安樂なものである。

自然に逆つて、私意を用ひ、我が思ひの儘にしやう、無理にもやつ、けやうとする。然うは行かない。乃ち、人生不如意の嘆となり、苦痛となり、罪科のないこの世界を、娑婆の、火宅のと罵りたくなる。その實、火宅は、心にあるので

自然に任せ、身に降りかゝるすべての運命を、無我で迎へて、無心で送り、これに逆ふことがなければ、娑婆も、淨土である。地獄も、極樂である。

極樂を、西にありとは、誰がいうた。鬼も佛も、みなみにぞある。

である。
即ち、一切を恃まずして、自然に任せ、無我、無心になり切るのは、死生存亡、吉凶禍福、すべての運命に打ち克つ所以で、取りも直さず、最も賢明に恃むのである。

一〇の三三 不變の友誼

◇君子の交りは、淡くして、水の如し。小人の交りは、甘くして、醴の如し。「禮記」

「凡そ、人の心の花の、折ふしにつけて移りゆくをいかゞはせむ。昨日、頼もし

と思ひし人も、今日は、相知る人とも覚えぬやうになり、又、相惡みし人も、いつの程よりか、馴れむつぶやうになりゆくは、やまと、唐の昔も今も、ためし多し。世のありさまなれば、人は、さもあらばあれ。已れ、慎みて、親むも、甚だしからず、疎きもことごとくしからぬやうぞあらまほしき。君子の交は、淡くして水の如く。小人の交は、甘くして飴の如し、と見えぬ。又、晏平仲といふ人、よく、人に交る。久しうして敬す、と孔子も褒めたまへりき。敬を持たば、移りゆく世の習にも、よく堪へぬべし。(伴藁蹊)

西洋の諺に、

好天氣の友は、風と共に變ず。

日本晴れの好天氣も、風と共に急變して、忽ち曇り、忽ち雨となる。利を以て交はる友は、利のある中こそ、親友の、心友のと、大騒ぎをするが、利の盡きると同時に、赤の他人になつてしまふ。輕薄、厭ふべしである。

そんなのは、いふに足らぬ。最初、意氣が相投じて、たゞの親切づくに始まつ

た、交りも、多くは、永續きしないで、次第に疎遠になり、結局、喧嘩で別れるやうな例が、世間、甚はだ、少くない。何うしたことが。

といふに、それは、交り方が悪いのである。親しい餘り、互ひに、禮を忘れ、敬を失つて、自分勝手に振舞ひ、我が儘を働く所から、つひ、不平を起し合つたり、腹を立て合つたりして、

『もう、君とは絶交だ。』

『此方から御免だ。』といふやうなことになるのである。

凡そ、親しいのは、結構であるが、

親しい仲にも、垣をせよ。

といふ諺がある。禮の垣、敬の垣がないと、その親しいのが、却つて、争ひの因になる。親子喧嘩、夫婦喧嘩、兄弟喧嘩、皆、それである。朋友の仲違ひもそれである。最も親しかるべき者程、最もよく喧嘩をする。その原因は、こゝに在る。禮と敬とを失ふに在る。

禮記には、

君子の交りは、淡きこと水の如し。小人の交りは、甘きこと醴の如し。君子は、淡きを以て成し、小人は、甘きを以て壊る。

と見え、論語には、

晏平仲、能く、人と交はる。久しうして、これを敬す。

とある。我々は、篤と、これ等に鑑みる所があつて、一旦、結んだ交りは、死ぬ迄、否、死後迄も、これを繼續するの工夫、これ肝要と知らなければならぬ。人の心は、變り易い。變つてよいこともあれば、悪いこともある。君臣、夫婦、朋友などの交りに於て、心が變るのは、その悪い側に立つ。

畢竟、操がないといふことになる。論語に、

年寒うして、松柏の彫むに後るゝを知る。「孔子」

とあるが、這般、操は、獨り、夫に仕へる妻のみのものではない。君に事へる臣、最も、操を必要とし、朋友の相交はる。亦た、操を第一とする。操とは何？ 久しきに互つて、心の變らないことである。

一〇の二三 大雅の奉納物

◇眞の技藝には、頭と手と心とが、相協同する。「ラスキン」

池大雅の奇行中、最も奇とすべきは、石刻の十三經を得やうとして、年來、心にかけて、漸く、百貫の錢を貯へたが、書肆では、なかなか、手放さうとしない。大雅は、少からず失望して、折柄、祇園の社に、社殿修築の事あつたを幸ひ、その金を奉納することにした。

その時の様子といふは、大きな席の袋に、神輿の紋の巴を畫き、十貫文づつ、十束にして、門人共々、禮服を着け、青竹の棒で差し荷ひ、仰々しく持ち込んだ社司が、

「お名前は？」と尋ねると、

「名は、出さぬことに願ひます。」と固辭し、強ひらるゝに及んで、玉瀾と、妻の

名を記した。

六如上人とは、昵懇に交はつた。大雅の歿後その遺像に題した上人の詩に、

鶉衣蓬髮意怡然。言語近禪形似仙。

避世仍懷濟世志。賣山不蓄買山錢。

蕨材滿屋纒容膝。川字成腔時弄絃。

至境深心誰可會。空令三姓字藝中傳。

(鶉衣、蓬髮、意怡然たり。言語は、禪に近く、形は、仙に似たり。世を避けて、仍ほ懐く、世を濟ふの志、山を賣りて、蓄へず、山を買ふの錢、蕨材、屋に滿ちて、纒かに、膝を容る。川字、腔を成して、時に、絃を弄す。至境深心、誰れか會す可き。空しく、姓字をして、藝中に傳

せしむ)

安永五年四月十三日、眞葛ヶ原の草堂に終つた。年五十四。病氣に罹ると、『今度は、癒らぬ』といつて、一切、藥を服まなかつたといふ。

X X X

六如上人の詩を誦し、尙ほ小引の一句に、

蓋し、眞を葆んで、俗に耦し、小伎に隠る、者なり。

とあるのを見て、その人を想ふに、大雅は、たゞの畫家でなかつたればこそ、

たゞでない繪が出来たのである。

近來、繪が流行る。金の捨て場所に困る大成金、小成金か、盲滅法、買ひ込む所から、下らない新畫が、五十金、百金、或ひは、千金、二千金を呼ぶ。この所畫家先生萬々歳で、中には、暴富を成した者もある。繪で大金持ちになるなどは古への名人巨匠も、恐らく、夢想しなかつた珍現象であらう。

がこの事、偶ま、斯道の禍ひとならぬか。今の畫家は、互ひに、收入の多きを競つて、その打算根性は、商人も跣足である。繪が流行る、高く賣れる、といふ事が、畫家を墮落させたのである。斯うした畫家に、氣韻のある、品位の高い、立派の作品のあらうわけはない。その全部が、實に、下らない、實に、俗惡を極めてゐる。

繪は、小伎であらう。而も、手先の仕事ではない。腹藝とでもいふか、亦た、

心の發露である。大雅の事を思ふにつけて、吾等は、畫家の修養問題を考へさせられる。筆の運び方、繪の具の塗り方を稽古するのみが、畫家の修養ではあるまい。

一〇の二四 孔子と隱者

◇樂しむに、天下を以てし、憂ふるに、天下を以てす。「伊藤仁齋」

長沮、桀溺といふ、二人の隱者が、共に、野良仕事をしてゐると、折柄、楚から蔡への途中に在つた孔子が、通りかゝり、弟子の子路を遣はして、渡船場を尋ねさせた。長沮は、此方を見て、

「輿の上に、手綱を執つてをるのは、誰れかね？」と問うた。子路は、
「孔丘です。」と答へた。
「魯の孔丘かね？」

「然うです。」といふと、

「それなら、渡船場を知つとる筈ぢや。」とばかり、再び、耕作を始めた。孔丘なら、天下を關流して、到る處、道筋を知つてゐる筈、人に尋ねる必要はない、といふので、暗に孔子の徒勞を笑つたのである。

子路は、已むなく、桀溺に尋ねた。桀溺は、顔を擡けて、

「貴公は、誰れぢや。」

「仲由と申します。」

「魯の孔丘の仲間か。」

「然うです。」

「悪い方へ、悪い方へと流れて、反ることを知らぬ者は、今の天下、皆、それぢや、誰れを相手に、改革する氣か。無駄な望みぢや。貴公も、人を避ける人に従はうより、世を避ける人に従つた方が、よくはないか？」といつて、種を蒔く手を輟めなかつた。「人を辟ける人」は、孔丘を意味し、「世を辟ける人」は、自分等を指す。

子路は、斯くと孔子に復命した。孔子は、憮然として、
「世を辟けるといつて、禽獸の仲間入りは、出来得べくもない。人を相手に、共々、改革事業に従ふの外はないではないか。道の行はれてをる天下なら、自分とても、苦勞はせぬ。」と、二人の隠者が、己れの意中を知らないことを、残念に思つた。

自ら、世の汚濁に投じて、不快を感じず、却つて、彌が上に、濁波を揚げやうとかゝる者がある。俗人が、それである。世の汚濁を厭つて、山林に隠れ、田間に遁れ、獨り、その身を潔よくせんとする者がある。隠者が、それである。古來奇人の目ある人にも、これが多い。俗人、勿論、いふに足らぬ。吾等は、隠者にも、遺憾がある。彼等に、眞と、憂世の心があるならば、何故、踏み留まつて、この世、この人の爲めに、革正の手を盡さぬか。彼等は、餘りに、利己的である。

こゝに於てか、志士仁人がある。「樂しむに、天下を以てし、憂ふるに、天下を以てす。」といふもの、これ、聖人孔子の志であつたのである。

一〇の二五 怒り易き人

◇押へても、堪忍袋、なかりせば、何にか入れん、疝癪の虫。「瀧澤馬琴」

寺の和尚、並外れて、怒りつほい。大勢集まつた席で、端なく、その噂が出て大笑ひをしてゐると、恰度そこを通りかゝつた和尚は、飛び込みざま、手當り次第に、打つてかゝつた。一同、それを取り押へて、

「これ、何をしなさる？」

「何も糞もあるか。俺のことを、よく怒るだの、疎卒かし屋だのと、俺が、何時怒つた？ 何か、疎卒かしい眞似をしたか。」と敦圀くと、此方は冷々然として、
「それそれ、そんなに怒つてゐなさるぢやないか。こゝにゐる大勢の中で、誰れが詆つたか、確かめないで、無闇に、拳骨を揮り廻しなさは、即ち疎卒かし

い證據でせう？」といふと、流石の和尚も、返すに言葉なく、逃ぐるが如くに立ち去つたとか。

人は、先づ以て、怒らないのをよしとする。

怒らないにも、色々ある。無神経で、怒らない者もある。愚人である。

怒らない者もある。實は、怒りを言語や動作に見はさない迄で、内心には、やはり、怒つてゐる。而も、何時迄も、怒つてゐる。

利害を思つて、打算的に怒らない者もある。するいのである。

決して、打算的といふのではない。怒ることの到底、小人の爲たるを思ひ、自ら重んずるが爲めに、じつと我慢し、忍耐して、怒らない者もある、まだ、至つたものではない。

至つた人は、無我、無心、我れにも、物にも、執着せず、束縛されず、何を見ても、何を聞いても、爲めに、心を動かさない。常に。夷然、平然、冷然としてゐる。一切の事物、一切の運命から超脱してゐる。彼れの爲めには、この地上に

怒るべき何ものもがない。縦ひ、自分を誹る者があつても、たゞ、聞いて笑つてゐる。

吾れ……六十にして、耳順ふ。「孔子」

とは、この心持ちである。これ、怒らないの上乗なるものである。

超脱の人は、怒らないが、時としては怒る。たゞ、怒り方が違ふ。私の爲めに怒らないで、公の爲めに怒る。私情でなくして、公情である。孟子曰く、

文主。一たび怒つて、天下の民を安んず。

と。これを公憤といひ、義憤といふ。

一〇の二六 交際の心得

◇富貴なれば、他人も合ひ、貧賤なれば、親戚も離る。「文選」

「權貴の家と。女多き家とには、屢々出入すべからず。主、るす家、長居すべか

らず。主人、欠伸せば、早く立つべし。人來りて問ふことありても、志、他に在らば、詳かに説くべからず、吾が好む事なりとも、人の好まざる事をば語るべからず。朋友にも、親切の意見、再三にして肯かずんば、止むべし。我が爲すべしと思ひ立ちたる事は、明日ありと思ふべからず。貧しき人は、疎み易く、富貴の人は、親しみ易く、金銀に臨みて、争心起るものなりと知るべし。」三浦梅園

これ、大體に於て、交際の心得である。平凡ながら、この間、聖賢の道がある。權貴の家に出入すれば、諂ふに似てゐる。女多き家に入れば、あらぬ噂が立つて、自分も迷惑、先方も迷惑、双方が、迷惑する。主人不在の家も、亦た、先方の迷惑になる。長居は、勿論、避けなければならぬ。

「貧しき人は、疎み易く、富貴の人は、親しみ易く。」——文選にも、富貴なれば、他人も合ひ、貧賤なれば、親戚に離る。とあつて、これ、人情の最も醜惡なる方面を道破したものである。最も戒しめ

なければならぬ。

一〇の二七 佛光禪師と北條時宗

◇驀直に進前せよ。「佛光禪師」

鎌倉圓覺寺の開山佛光禪師は、宋の明州慶元府の産である。夙に、佛門に入り修道多年、聲光の四方に輝くに及び、北條時宗に聘せられ、弘安三年、我が國へ渡來した。元寇の役に、時宗は、軍裝して禪師に見え、
「大事、到來す。如何か用心せん？」と問うた、禪師は、たゞ一言、
「驀直に進前せよ。」と教へた。時宗は、威を揮つて、喝一喝した。禪師は、
「眞に獅を兒！ 能く哮吼す。」と賞めた。時宗は、拜謝して出ると、その儘、筑紫に向つた。

弘安九年九月三日、禪師は、

諸佛凡夫同是幻。若求實相眼中空。

老僧舍利包天地。莫向空山撥死灰。

(諸佛、凡夫、同に是れ、幻、若し、實相を求むれば、眼中の埃。老僧の舍利、天地を包む。空山に向つて、死灰を撥すること莫れ。) の偈を遺して、示寂した。壽六十一といふ。

X X X

元兵十萬、筑紫を襲つて、大事は、既に到來した。思察も、分別も、要るものではない。たゞ、驀直に進前するの一途があるばかり。驀直に進前せよ。——佛光禪師は、事の已むを得ざる所を示したのである。

人は、事の已むを得ざる所に従ふのを、最良、最上の策とする。事の已むを得ざる所は、人力の及ばない所である。これ、天命である。これ、自然である。事の已むを得ざる所に従ふのは、天命に従ふのである。自然に従ふのである。失敗しても、仕方がない。成敗利鈍を餘事に附して、たゞ、驀直に進前する——これに上越す策はない。

一〇の二八 佛光禪師の解脱ぶり

◇珍重す、大元三尺の劍。電光影裏、春風を斬る。「佛光禪師」

佛光禪師が、まだ、宋に在つた時の事である。臺州の眞如寺を管してゐると、徳祐乙亥の年、元の兵が、侵入して來た。禪師は、温州の能仁寺へ避けた。温州亦た、元兵の侵入を受け、衆は、先を争つて奔竄した。その間に在つて、禪師たゞ一人は、禪堂に籠り、安然として、動かなかつた。すると、忽ち、元兵が突入して、刀を揮つて、禪師の頸に擬した。禪師は、神色、常の如く、徐ろに、偈を説いた。

乾坤無地卓孤筇。喜得人空法亦空。

珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。

(乾坤、地の孤筇を卓つるなし。喜び得たり、人空、法亦た空、珍重す、

大元三尺の劍、電光影裏、春風を斬る。
元の兵は、懺謝して、他に向つた。

人や、法や、その實相を討ぬれば、眞如である。眞如は、空の状態に在るものである。眼、見るべからず。耳、聞くべからず、鼻、嗅ぐべからず。舌、味ふべからず。手、觸るべからず、足、踏むべからず、畢竟じて、無である。

無である。人もなければ、物もない。彼れもなければ、我れもない。萬法を併せて、平等に歸し、一如に歸し、無差別に歸する。

無を有にし、乃至、無差別を差別にするものは、心である。心地觀經に、我が佛法の中、心を以て主と爲す。一切諸法、心に由らざるはなし。

といひ、華嚴經に、心、諸々の如來を造る。

といひ、古徳の偈に、

迷故之界城、悟故十方空。

本來無三東西、何處有南北。

(迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空。本來、東西なし。何の處にか、南北あらん。)

といふの類、皆、この間の消息を語るに外ならぬ。

果して然らば、人は、元來、無のものである。他の萬人、萬物と、無差別を相成して、我れといふべきものはない。我れがなければ、我が死もない。生死、畢竟、空の空で、これを有とするのは、心の爲である。

大乘佛敎の見る所、略ほ、斯くの如くである。これを小乘よりするも、人は、四大の寄せ細工、自性のあるものではない。希臘の哲學者、エウペドクレースの説に、

天地間、一物の生滅するものはない。たゞ混和するのみである。又た、混和した物が、離散するのみである。然るに、人は、これを名けて、生滅といふ。

直ちに、これ、小乘佛敎の見方である。

古人の歌に、

引き寄せて、結べば草のいほりにて、とくれば、元の野原ありけり。
とあるもの、譬へ得て妙である。集散はある。離合はある。生死、決して、あることなし、といふのが、小乗佛教の生死観である。

小乗、大乘、その何れに據るも、人に生死はない。ありとするのは、迷ひである。大元三尺の劍が、何であらう？ 本来無我の身、これを斬るは、猶ほ、春風を斬るが如くである。痛くもない。痒くもない、生きもせぬ。死にもせぬ。

一〇の二九 近道好きの失敗

◇急がば廻れ。『日本俚諺』

「何でも、利巧に、近道を立ち廻つて、早く成功せねばならない」と、そんな考へで日を送る男、或る時一人旅をして、廣い野原を通りかゝると、急に、便通を

催して来た。早速、路傍の野雪隠へ駆け込んだが、さて、氣が揉める。

「こんなことに、時間を費すのは、詰らない。大分、道を損するわけだ。あゝ、何とか、便法はないか知ら？ 近道はないか知ら？」と思案の末、忽ち、一計を考へ出した。

「斯うしてゐる中に、辨當をしてやらう。」といふのである。

「成程、それがいゝと、懐ろから、皮包みの握飯を取り出す途端、山蜂の大きなのが飛んで来て、大事のところを、ちくりと螫した。これはとびつくり、思はず、握飯を取り落して、じつと下を覗いてゐるが、丁と、横手を打つて、

「は、あ、これは、近道だ。」

手で口へ入れ、齒で嚙んで、胃へ送り、胃で消化して、さて、腸を通して、下へ落すのが、順序。手から、直ぐ、落してしまへば、成程、こんな近道はない。たい困るのは、體の養ひにならない事である。

道には、本道と近道がある。慾の深い者、智者、才子、利巧者と己惚れる者

は、本道を迂遠として、左右、近道を通したがる。正直を旨とし、勤勉、節儉の徳を守るのが、金持ちになる本道である。これを迂遠として、一攫千金の山事に手を出したり、法外な暴利を貪つたりの近道を通る。忠實を第一とし、與へられた仕事に出精するのが、官等昇進の本道である。これを迂遠として、賄賂を取つたり、上官のお髭の塵を拂つたりの近道を通る。成程、近道であらう。如何せんや。

あ、しまつた、近道に橋がない。
の失敗がある。

本道は、自然の道である。近道は、人爲の道である。自然には、無理がない。人爲には無理がある。無理は、通らない。近道に失敗の多いわけで、迂遠に見える本道こそ、結果に於ては、却つて、これ、近道である。西郷南洲の、事、大小となく、正道も踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆべからず。人多くは、事の差支ゆる時に臨み、策略を用ひて、一旦、その差支を通せば、後の、時宣次第、工夫の出来るやうに思へども、策略の煩ひ、訖度生じて、

事、必らず敗る、ものだ。正道を以てこれを行へば、目前には、迂遠のやうなれども、先に行けば、成功に早きものなり。
といつてゐる。詐謀といひ、策略といふの、亦た、自然の本道ではなく、人爲の近道であることは、いふ迄もない。

孔子は、「好んで小慧を行ふ」(論語)のを、小人の事とした。子游は、配下の澹臺滅明が「行くに徑に由る」(論語)のを喜んで、能く、人を得たものとした。子の事を行ふは、本道に由つて、近道に由らず。猶ほ、日月の皎然たるが如くでなければならぬ。

一〇の三〇 外貌と内心

◇人は見かけによらぬもの。「日本俚諺」

「太公曰く、夫れ、士、外貌と中情との相應せざる者、十五あり、賢にして、不

肖なる者あり。温良にして、盗を爲す者あり。貌、恭敬にして、心、慢なる者あり。外、廉謹にして、内に至誠なき者あり。精々にして、情なき者あり、湛々にして、誠なき者あり。謀を好んで、決せざる者あり。果敢にして、不能なる者あり。恠々にして、不信なる者あり。恍々惚々として、反りて忠實なる者あり。詭激にして、功効なる者あり。外、勇にして、内怯なる者あり。肅々として、反りて人を侮る者あり。嚙々として、反りて、靜態なる者あり。勢は虚、形は劣して、外に出でて、至らざる所なく、遂げざる所なき者なり。(六韜)

心と身との間に、密切な關係のあることは、必らずも、心理學者の説も俟たぬ人の容貌、態度、言語、動作などが、或る程度迄、その人の内心を見はすことは何人も熟知する所であるが、それは、たゞ「或る程度迄」である。世には、色莊者流が多く、又た、

猫を被る。「日本俚諺」
綿に針を包む。「同」

X

X

X

X

外面如菩薩、内心如夜叉。「同」

などいふのも少くない、結局一人は、見かけによらぬもの。である。

であるから、外貌を以て人を取れば、多くは中らない。

外貌は、人の身についたものである。寧ろ、身そのものである。心と表裏を相成して、分つべからざるものである。尙ほ且つ、心を如實に見はさず、却つて、反對する場合が多いとすれば、人の財産や服装は、決して、あてになるものではないが、拜金主義全盛の今の世には、金を持つた人、即ち、偉い人である。美服を纏つた人、即ち、紳士である。彼れは、信用の出来る人である。正直な人である。危なげのない人である。手腕のある人である。役に立つ人である。今の人は、斯うしたあてにならない者をあてにして、人を取る。官廳に於て然り、銀行に於て然り、會社に於て然り、商人が、取引先を選ぶに於て然り。一般に、交際する人を選ぶに於て然りである。

たゞ、識者のみは、それ等のあてにならないことを知つてゐる。

馬を相するには、これを瘦するに失す。士を相するには、これを貧しきに失

す。「史記」

駿馬は、大概、瘦せてゐる。驚馬は、でぶでぶ、太つてゐる、古人の所謂る。貧賤は、土の常なり。

で、營利に念のない眞の士が、貧乏なは、當り前のことである。識者は、決して、財産や服装には欺かれない。

一〇の三一 中倉忠宣世外の情

◇何やらに、忠宣といふ、名をつけて、花よ月よと、騒ぎけるかな。

「中倉忠宣」

中倉忠宣は、勢州朝熊の産である。京へ出て、修學中、二十五の年に、病氣に罹つて、危ふく死に損ふと、

「今後の命は、世外のものぢや。」とばかり、爾來は、物を物ともせず、春の花、

秋の紅葉には、夜晝となく、酒を飲み暮し、金を見れば、人のものともいはず、使ひ捨て、我があれば、人に與ふること、瓦石の如くであつた。たゞ、夏と冬とは門戸を閉ぢ、書を読んで、敢へて、人とも交はらなかつた。

或る年の正月、ふとした事から、寒疾に犯されて、足腰が立たず、宛然として、甦りになつた。けれど、少しも屈託せず、些かな勸進帳を拵へて、

三吉野の、花や乞食をしてなりと。

と書きつけ、恥づる様子もなく、都大路を甦りながら、知人の家々を廻り、日ならずして、許多の金を得た。駕籠を雇つて、吉野に遊び、歸りは、大阪へ出て知邊を訪ひ廻り、

橋立の、月や乞食を、してなりと。

と書きつけたので、誰れも、

「これは面白い。」と、興がりつゝ、數金を與へた。喜んで、橋立の月を賞し、城の崎へ廻つて、温泉に浴すると、その效能で、甦りが癒つた。

死ぬ前、知人へ頼つた辭世に、

何やらに、忠宣といふ、名をつけて、月よ花よと、騒ぎけるかな。

その辭世を見るに、この人、無我の理に於て、若干、了悟する所があつたのである。世外の情、甚はだ高しとしなければならぬ。たゞ、世外の人を以て終つたことを遺憾とする。

× × ×

一一の一 乞食挑水と歸依の尼某

◇心は、これ、惡の源なり。形は、罪の藪なり。

「八大八覺經」



「乞食挑水」で通つた僧挑水、諱は雲關、筑後の人である。肥前島原禪林寺に住持中、一朝、感ずる所があつて、跡を匿して後は、誰れ一人、その行方を知る者がなかつた。時に、歸依の尼某といふが、方々、尋ね廻つた末に、洛東四條河原へ行くと、師の挑水が、菰を被つて、同じ姿の、乞食の病人を介抱してゐるのを見て、涙を流して、これを拜し、さて、師の爲めにと、自ら、絲を紡ぎ、年を経りて織り上げた寢具を、背から取り下して、挑水に進めた。

挑水は、

「今の身には、用のない品ぢや。」といつて、受けやうとしなかつた。尼も、然る者で、

「御不用とならば、お心次第、如何やうにも遊ばされよ。一旦、和尚様へ供養致しました上は、直ぐ、お捨て下されても、恨みには思ひませぬ。」といふと、挑水は、

「然らば……」と受けて、やがて、右の病人に打ち被せた。

驚いたのは、他の乞食仲間で、

「これは、たゞ人ぢやない。」と語り合ひ、俄に、挑水を崇め出した。挑水は、それを厭つて、早々、その處を去つた。

X X X

挑水が、禪林寺を去つて、乞食の仲間へ入つたのは、無慾の徹底修行を積まんで爲めてあつた。

世界は、慾の世界である。名利の慾に、目を皿にした有象無象が、狂舞し、亂

踏し、さながらの瘋癲院を成してゐるもの、これが、世界の相である。斯うした中に棲んだのでは、自然、物の汶々を受けなければならぬ。佛道の要が、先づ以て、慾を斷するに在るならば、この世界は、決して、忘ある者の住所ではない。

世を捨て、山に入る人、山にても、なほ憂き時は、いづち行くらん。

の疑問はありながら、吾等は、山林隱遁の人に同情する。挑水が、禪林寺を去つたのも、こゝに感があつたので、その心持ちは、察するに難くない。

而も、挑水は、山林へ遁れないで、乞食の仲間へ入つた。慾を思ふのは、身を思ふのである。この身を、出来得る限り、味噌糞に扱つて、身を思ふ心を、徹底的に斷じ去る——これが、先決問題である。この問題の解けない限り、無慾といふも、上つ滑りの無慾で、いふに足らぬ。挑水が、山林に遁れるのを未だとして、挺身、乞食の仲間へ入つた心持ちは、これ亦た、察するに難からずである。

であるから、挑水は、尼の贈り物を受けなかつた。その身を味噌糞に扱はんが爲めに、乞食の仲間へ入つた挑水が、苟くも、身の安樂の資けとなるやうな品を受けなかつたのに、不思議はない。徹底的に、無慾の修行を積まうとしてゐた者

が、假初にも、人の慾心を憐るに足るべき品を受けなかつたのは、素より、その處である。それを受ける程なら、特に、禪林寺を去らなかつたであらう。桃水に教へられた尼ながら、女の淺墓さ、師の深意を解するには及ばなかつたものと見える。

乞食等の、自分を崇め出したのを厭つて、再び、跡を滅した理由も、こゝに至つて、明白である。

楞伽經に曰く、

心は、境界に隨ひて流る。鐵の磁石に於けるが如し。

と、無慾の修行を積むと稱して、尙ほ且つ、衣、食、住に不足をいふなどは、大間違ひの骨頂である。身を味噌糞にすること、桃水の如きは、所詮、學び得ることではないが、衣は、寒暑を避くるに足り、食は、飢餓を免るゝに足り、住は雨露を凌ぐに足る、とだけ位るの用意はありたいものである。

二の二 桃水とその二弟子

◇身を愛するは、善からぬことの第一なり。「西郷南洲」

桃水とその二弟子

同じ頃、弟子の兩僧、琛洲智傳も、手を別けて、尋ね求むること三年、安井門の前で、乞食の集まつた中にゐる師桃水を、先づ、琛洲が発見した。琛洲は、且つ喜び、且つ憂ひ、直ちに進んで、師を拜したが、一言にも及ばず、たい、さめさめと泣いた。桃水は、自若として、

「小僧、用もない處へ、尋ねて來たか。行け、行け。今生では、面談せぬぞ。」といひ捨て、その場を去つた。

琛洲は、その後を追ひながら、
「この上は、御一生をお見届け申して、その上で、如何やうとも致します。何卒

お側に……』と乞った。桃水は、見向きもせず、

『御無用！ 御無用！』と、足早に行く。尙も、その後を追ふと、

『では、俺のする事を見よ。』といつて、その儘、江州の天津へ伴ひ、坂本から、堅田の方へ行くと、路に、乞食の行き倒れがあつた。桃水は、琛洲に手傳はせてそれを埋め、さて、その死人の食ひ餘した物を、自ら食ひ、残りを琛洲に與へた。琛洲は、一口、食つて見て、臭さ、穢さに堪へず、直ぐ、吐出してしまつた。桃水は、それを見て、

『ぢやによつて、来るなといつたのぢや。』とのみ、又復、他へ去つた。

時に、琛洲の聞きつけた偈に、

如是生涯如是寛。 弊衣破椀也閑々。

飢餐渴飲只吾識。 世上是非總不干。

(是くの如き生涯、是くの如く寛し。弊衣、破椀、也た閑々。飢えては餐し、渴しては飲むを、只だ、吾れ識る。世上の是非、總べて、干からず。)

X X X

桃水の乞食生活は、身を味喰糞に扱つて、徹底的に、無慾の修行を積まんが爲めであつた。即ち、前に記した通りである。桃水は、その師團巖の許に在つた時の事である。面山の桃水和尙傳書に、

團巖、ある時、諸弟子衆を教化し玉ふ辭に謂く、佛の弟子を誡め玉ふ内に、沙門は、五欲を離る、を專要とす。五欲とは、色欲、食欲、睡欲、名欲、利欲なり。この内、初の三欲は、出家の身は、離れやすし。たゞ、名と利との二欲は、出家も、離れがたし。年臘も長じ、諸人も崇む程なれば、彌、名利は重厚になり、後は、道理を着て、名利に傲る。古徳の教誡する、これ、第一と覺ふ。我が徒弟たらん人、智見、解會は、人々の修行の力量程なるべし。たゞこの二欲を、常に心に繋て、離る、様にめされよと、委曲丁寧なり。各、聞いて默然たりしに、師獨り、つぶやきて、大してもなき事を、難題の様に教化せらる、と云れしとぞ。

と見えてゐる。當時の桃水は、まだ、二十歳前後の若法師であつた。師の教化

を一笑した所から想ふに、桃水は、この時、既に、この間の事に於て、相當の修行を積んでゐたのである。

世間、桃水を目して奇人とし、その行爲を、たゞの奇行視する者が多い。桃水を知らないのである。人を見る者は、その外見、外状に囚はれないで、直ちに、その心境、心地に迫るの用意がなくてはならぬ。

一一三 黒馬の尾が白い？

◇偽りの、着物をさせず、人はたゞ、生れのまゝの、裸こそよき。

「協義名堂」

或る男、黒馬に乗つて、戰場へ出たが、元來、大の臆病者で、敵と戦ふなどは思ひも寄らぬ。故意と、戦死者の血で顔を汚し、草の中に倒れて、死んだ眞似をしてゐる間に、敵の爲めに、馬を奪ひ去られたが、それでも、命だけは助かつた。

戦争終つて、怖わ怖わ、起き出し、側に斃れた白馬の尾を截り取つて、意氣揚々、味方の陣へ引き返し、口から出任せの功名話をする、聞き人の一人が、
「して、貴公の馬は？」と尋ねる。

「然ればでござる。亂軍の中に射すくめられ、無残の最期を遂げ申した。畜生とは申せ、屢ば、戰場に伴うたる彼れ、不憫に存じ、形見にもと、これこの通り、彼れの尾を截つて、持ち歸つてござる」と答へると、相手は、合點せず、
「然し、貴公の馬は、黒馬の筈。その尾の白いは、如何なこと？」との反問に、臆病者、ぐつと詰つて、

「それは、その、實は、その……」

臆病者は、臆病者らしく、人の後ろに、小さくなつてゐるがよい。無學の者は、無學の者らしく、口を噤んでゐるがよい。愚人は、愚人らしく、人の先棒を揮らないがよい。人は、自ら知らなければならぬが、自ら、己れの欠點、短所を知る者の、最良の隠れ家は、「謙遜」の二字に在る。謙遜な人の欠點は、然迄に目立た

ず、却つて、人の同情を惹く。

又た、相成るべくは、最初から、欠點をさらけ出してかゝるがよい。じうして、ありと爲し、虚しうして、盈てりと爲し、約しうして、泰かなりと爲す。「論語」

といつたやうな、胡麻化し手段を用ひ、臆病の癖に、武勇を誇つたり、乃至、愚人の癖に、智者を装つたりすれば、人にも眼があつて、直ちに、その人の真相を看破するは勿論、斯うして看破される真相は、實際よりも醜いのが常で、欠點が一倍、著るしい。後から露はれる欠點は、前から見てゐる欠點よりも、大きく見えるのが常で、心理學に所謂の相對律は、この場合にも適用される。

であるから、「偽りの、着物をきせず、人はたゞ、生れのまゝの、裸にこそよき。」である。

□虚言者に、報ゆるの法は、其の言ふ所を信ぜざるを、第一とす。

アリスチツフアス

一一の四簡易な生活

◇後世を思はん者は、糞汰瓶一つも、持つまじき事なり。「一言芳談」

『尊き聖のいひ置きける事を書きつけて、一言芳談とかや名けたる草子を、見侍りしに、心に會ひて覺えし事ども。』

- 一、せやせまし、せずやあらましと思ふ事は、大様は、せぬは善きなり。
- 一、後世を思はん者は、糞汰瓶一つも、持つまじき事なり、持經・本尊に至るまで、よき物を持つは、由なき事なり。
- 一、遁世者は、なきに事缺けぬ様を計らひて過ぐる、最上の様にてあるなり。
- 一、上臈は、下臈になり、智者は、愚者になり、徳人は、貧になり、能ある人は、無能になるべきなり。
- 一、佛道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にか

けぬを、第一の道とす。

この事もありし事ども、覚えす。「徒然草」

五個條の説、皆、出家遁世の人の爲めに物せられたものではあるが、假りて以て、我々俗人の處世訓に充てること出来る。生活は、須らく、簡易、簡單でなければならぬ。谷川の水の、さらさらさつと渡られる世を、念々の、塵と芥に、まとはれて、にごり江を出ぬ、人ぞはかなき。

「協義義堂」

で、名利の、權勢の、家を何うして、屋敷を斯うして、衣服はこれ、道具はあれと、様々の塵芥、餘計な物に、餘計な苦勞を持ち添へて、年中を苦しみ通す我々の生活は、決して、宜しきを得た生活ではない。今少しく、簡易なるべきである。この五個條は、簡易生活の眞諦を道破したものとて、甚はだ、傾聴するに足る。

一一の五 桃水弟子に示す

◇汝、唯、諸侯に酔ふこと勿れ。「近世畸人傳」

彼の時以後、桃水の行方は、久しく、不明に歸した。

然るに、或る時、肥後熊本の寺僧が、國侯細川氏を大檀那として、儀衛堂々、勢ひ猛に、關東に赴く途すがら、大津に休息すると、供の馬士が草鞋を買はうとして、

「爺さんよ。」と呼んだ。この日頃、左ある家の軒下に、小屋を差しかけて住む、一人の汚らしい老人があつて、その造る草鞋が、穿きよくもあり、保ちもよいとの事で、爺の草鞋、爺の草鞋と、馬士、輿丁などが、持て囃してゐたのである。

「おい。」と應じて、草鞋を片手に老人が現はれた。寺僧が見ると、その老人、即

はち、桃水である。

寺僧は、一驚、駕籠を轉び出で、手を執つて、涙を流した。これ亦た、桃水の弟子であつた。左や右も、舊を語り、いざ、別れるといふ時、示しを乞ふと、

「たゞ、大名に酔ふなよ。」とばかり、復も、その地を去つた。斯くて、一旦、京の片ほとりに、小家を借り、僧形に返り、托鉢してゐるが、後ち、洛北鷹峰に遷り、酢屋道金と自稱して、酢を賣りながら、年を経、天和三年秋九月、遷化した。

大津に在つた頃、或る人が、その老年を憐れんで、大津繪の阿彌陀佛の像を贈ると、それを小屋にかけ、消炭で贄をつけた。

せまけれど、宿をかすぞや、阿彌陀殿。後生頼むと、おほしめすなよ。又た、遷化の時の遺偈に、

七十餘年、快哉、屎臭骨頭、堪作何用。咦、眞歸處、作塵生。

鷹峰月、白風清。

(七十餘年、快なる哉。屎臭の骨頭、何の用をか作すに堪へたる。咦。眞

歸の處 作塵作 鷹峰の月、白風清し。)

「汝、唯、諸候に酔ふこと勿れ。」——一語、寺僧の胸元を抉るに足つたであらう。

抑も、諸侯に酔ふとは、如何？ 富貴に酔ふとは、如何？

「平生、富貴の人に接する者は、無暗に、その人があり難くて、これを讚美するの餘り、その一顧一盼にも、隨喜の涙を流す。それはまだしも、乞食根性を起して、その人の觀心を買ひ、御利益に與からんが爲めに、へら笑ひやら、おべつかやら、醜態百出、目を掩はしむるものがある。意氣も、氣概も、あつたものではない。その癖、名利の慾が熾んで、同輩などには、横柄な面構へをする。富貴の人の眞似がしたのである。これを稱して「富貴に酔ふ」といふ。

酒に酔ふ者は、酒の爲めに、本性を失ふ。女に酔ふ者は、女の爲めに、本心を失ふ。そして、富貴に酔ふ者は、たゞたゞ、名利の奴となつて、人間、別に貴ぶべきもののあることを忘れてしまふ。而も、平生、富貴の人に接近して、富貴に

酔はない者のない所を見ると、忘れても立ち入るまじきは、富貴の家である。権勢の門である。

一一の六 林羅山の銅庫焼く

◇事、豫めすれば立ち、豫めせざれば廢る。「中庸」

林羅山は、赤原惺窩の高弟で、徳川時代の三百年を通ずる、林家歴代の祖業を建てた人である。

明歴の大火に、門下の一人が、慌たしく、やつて来て、

「到底、免れられませぬ。」と報じた。羅山は、

「然うか。」とばかり、書を読んで、頼まなかつた。

又復、門人が、馳せ着けて、

「つひ、近所迄、焼けて來ました。何故、お逃げになりませぬ。」と促がした。

羅山は、書物を手にした儘、駕籠に乗り、駕籠の中でも、読んで頼まなかつた。既にして、郊外の別邸へ入つた。神色、自若として、相變らず、書を読んだ。間もなく、人があつて、

「お屋敷も、到頭、焼けてしまひました。」と報じて來た。羅山は、顧みて、

「銅庫は？……」と問うた。銅庫、即ち、銅製の書庫で、將軍よりの拜領品である。

「はい、やはり、焼けましたので……」との言葉に、これ迄、夷然としてゐた羅山は、忽ち、顔色を變じ、天を仰いで、

「多年、一生懸命に集めた書物が、一朝にして、灰になつたか、實に惜しい、實に惜しい。」と洪嘆したが、この夕、鬱々として樂しまず、越して五日、奄然として長逝した。

x

x

x

書畫、骨董を貯へるのはよい。衣類、道具を調へるのはよい。たゞ、それ等の品が、同時に火事の際の焚きつけであることを覺悟してゐないと、他日、楽しむ

爲めに貯へたのか悲しむ爲めに貯へたのか、解らないやうな結果になる。將た、喜ぶ爲めに調へたのが、事實に於て、憂ふる爲めに調へたといふ。妙な事に成り行く虞れがある。中庸に、

事、前に定まれば、困しませぬ。

とあるが、左右、前以ての覺悟が肝腎である。

大儒林羅山にも、その覺悟がなかつたと見えて、銅庫の爲めに、壽命を縮めた。多年力蓄の書籍である。その貴ぶべきこと、書畫、骨董の類ではなく、愛惜の情は、然ることながら、到底、不覺悟たるを免れないであらう。如何？

但し、死者十萬八千人を出したと傳へられる明曆の大火を眼前にして、書を讀んで輟まず、屋敷の焼け落ちたことを耳にして、少しも驚かず、銅庫の焼失を聞くに及んで、初めて、痛嘆の聲を發した所は、流石に、一世の碩學らしい。素より、凡人と撰を異にしてゐたことを讚美して置く。

一一の七 進物の八年母

◇かしこさの、己が心に、つながれて、うきを猿の、なく聲を聞け。

「脇坂義堂」

「おい、長松、この九年母を品川へ持つて行け。」

「はいはい。」と威勢よく出かけたが、つひこの頃、田舎から出て來たばかりで、これ迄、九年母といふのを見たことがない。

「何だらう？ 九年母つて、聞かない名だが……」と、首を傾げながら、そつと、籠の蓋を除つて見ると、旨さうな果物が入つてゐる。數へて見ると、正に九つ。

「はい、あ、九つだから、九年母か、よし、よし」と、早合點して、忽ち、一つを袂へ忍ばせ、先方へ行つて、

「御免なさい。」

『はいはい。』

『私は、芝の伊勢屋から参りました。ほんの一つでございますが、この八年母をお目にかけます。』とやると、取次の女中が、びつくりして、

『お前さん、何をいふのさ？ 九年母ぢやないか。』

長松は、早くも悪事が露はれたかと、眞つ赤な顔をして、

『實は、一年母を匿しましたので……』きまり悪げに、袂の一つを取り出した。

X X X

道は、自然である。聖人、君子が、勝手に案じ出したものではない。自然は、ありの儘である。道を行ふのは、他の事を行ふのではない。たゞ、ありの儘を行ふのである。ありの儘を行へば、それが、直ぐに、道に叶ふ。

正直といふも。ありの儘をいひ、ありの儘を行ふことに外ならぬ。

所が、人は、ありの儘の正直を嫌つて、左右、嘘を吐きたがる。嘘を吐くには智慧が要る。

小兒と愚人は、眞實を語る。「西洋俚諺」

といふが、それは、然うあるべきで、馬鹿では、嘘を吐かれない。世間の嘘吐きは大概、智慧者である。若しくは、自分を智慧者と信じてゐる者である。

如何せんや、嘘は、通らない。智慧は、大したものに相違ないが自然は、一層

大したものである。人間の智慧など、何になるものではない。自然の道は千里、

萬里の外迄も、一直線に通じてゐるが、嘘の道は(〇)、ほんの二三町、或ひは二

三間で、忽ち、行き詰つてしまふ。嘘は、自然の道に背いて、自分勝手に、別の

道造るのである。小さな智慧で造る道、何れ、満足な道でないに定まつてゐる

何うして、通られやう？ 躓き轉んで、怪我をするのが、落ちである。

正直といふ、自然、ありの儘の、安全な道があるものを、然りとは哀れな猿智

慧殿！

一一の八忍の徳

◇忍の明たる、日月に踏えたり。「丑辱經」

「忍の明たる、日月に踰えたり、龍象の力は、盛猛と謂ふべし。これを忍に比ぶれば、萬々にして一に如かず。七寶の耀きは、凡俗の貴ぶ所なり。然れども、其の愛ひを招きて、以て、災患を致す。忍の寶たる、終始、安きことを獲。十方に布施すれば、大福ありと雖も、その福、忍に如かず。忍を懐き、慈を行せば、世々、怨みなく、中心恬然として、終に、毒害なし。世に怙むところなし。唯だ忍のみ恃むべし。忍は、安宅なり。災怪、生ぜず。忍は、神鎧たり。衆兵、加へず。忍は大舟たり、以て、難を渡るべし。忍は、良藥たり。能く、衆の命を救ふ。忍者の志、何の願ひか獲ざらんや。」(忍辱經)

X X X

爲すべき事がある。爲すべからざる事がある。爲すべきを爲すのは、勇である。爲すべからざるを爲さないのは、忍である。勇は、積極的である。忍は、消極的である。勇は、動である。忍は、静である。勇は、進んで取るに足り、忍は、退いて守るに適する。勇は、危密を克服して、己れの運命を開拓するの道であつて忍は、災禍から免れて、我が平安を保持するの術である。勇と忍とは、車の兩輪

である。鳥の兩翼である。忍の美德たるは、勇の美德たるが如くである。兩々、相待つて、道、こゝに行はれ、身こゝに全きを得るのである。世間、勇の、積極的なるを喜んで、忍の、消極的なるを厭ふ者が多い。消極的を素地としてのみ、積極的の行はれることを知らないのである。思はなければならぬ。

一一の九 石川丈山の隱遁生活

◇渡らじな、世見の小川の、淺くとも、老の波そふ、影は恥づかし。

「石川丈山」

石川丈山、名は重之、世々、濱松の士である。元和元年、大阪夏の陣の時、家康の麾下に屬して、天王寺口に在つたが、
「人並の軍をしたのでは、見所もあるまい。」と、或る程、たゞ一騎營中を忍び出

て、敵城に迫り、櫻の門といふ處で、佐々十左衛門主従を討ち取り、還つて、その首を實檢に供した。家康は、深く、その武勇に感じながらも、軍令に背いた罪は重い、見許すべきに非ず、とのことで、遂に、これを勘當した。

こゝに於て、丈山は、淺野侯に寄食し、をること十年、比叡の麓、一條村に世を避け、詩仙堂を創し、六々山人と號し、山水、花月に情を慰めた。詩仙堂とは廣宋の諸名家、三十六人を選んで、一人々々の像を、狩野探幽に畫かせ、その詩一首づつを自書し、これを梁上に掲げたからの名である。蓋し、本朝三十六歌仙に擬したものと云ふ。

隱遁の後は、世俗の交りを絶ち、曾つて、京へも出なかつた。後水尾天皇にはその風流を聞き召されて、召命を賜はつたけれど、固く辭し奉つて、

渡らじな、世見の小川の、淺くとも、老の波たつ、影は恥づかし。

と申し上げたので、哀れに思し召し、『心に任せよ。』との御説があり。且つ、歌の「波立つ」を「波そふ」と、紫黄を下させられた。

丈山は、初め、兼原惺窩に學び、林羅山、堀杏庵、僧元政、明人陳元、贊などと親交があり、最も、詩を善くした。覆醬集、北山紀軍は、その詩集である。兼ねて、丹青の技に長じ、又た、隸書に巧みで、我が國中古以來に於ける隸書の祖と迄、推賞せられた。寛文十二年五月二十三日、享年九十歳にして歿した。

翁、爲人、剛直にして勇あり、其の穎敏なるも、亦、人に過絶す。二歳のときのことをよくおほえ、四歳にして、成人の如く歩行す。十六にして仕へ、三十にして退き、老母につかへて、孝を盡し、四十にして、隱遁の志を堅くせり。實に、稀代の隱士といふべし。

と、伴蒿蹊は、記してゐる。

X X X

丈山は、實に、「稀代の隱士」であつた。大阪の役に、軍令に背いたのも、この時、既に、隱遁の志があつて、故意とそんな舉動に出たのではあるまいか。四十にして隱遁の志を堅くせり。——而も、その志たる、一朝の故ではなかつたのである。

小人跋扈の世の中は、高士の堪へ得る所ではない。彼等に伍して、名利の途に狂奔するのは、その忍び得る所ではない。志士仁人は、勿論、萬人の代表である。貴ばなければならぬ。内に、濟世救民の志があり、その志を行ふに必要な経綸があり。才能であつての事ならば、孔子に倣つて、

售らんかな、售らんかな、我れは、賈を待つ者なり。

とばかり、世俗に混じて、その塵を受けるのもよい。たゞ、一身、一家の榮華を求め、爲めに、錙銖の利を争つて、一生を終る者、單に、代議士たるの虚名を欲するが爲めに、政治運動に没頭して、還るを知らない者は、皆、俗物である。寧ろ、山林隱遁の士の高きにかかぬ、

が、俗物は、俗物である。俗物は、名利の人である。名利以外、人間より、貴ぶべきもののあることを知らず。全然、名利の爲めに生きるものである。俗物から名利を取り去れば、跡には、たゞ零が残る。名利は、俗物の生活のすべてである。俗物の人生は、名利によつてのみ、意味づけられる。名利を措いて、俗物の人生は、無意味である。その生は、猶ほ、その死の如くである。俗物から名利を

取り去ることは出来る。

こゝに於て、學問の必要がある。俗物たる者、須らく、書を読み、道を學んで名利以上、大に貴ぶべきもののあることを知るべきである。これを知れば、彼れを知る。彼れとは、何、名利の求むるに足らず、名利の生活の、決して、眞の生活でないこと、これである。隱遁生活の、却つて、眞の生活であること、これであらう。

丈山は、學者であつた。詩人であつた。殺風景なる武人の生活、戰場を馳驅して、功を競ひ、名を争ひ、以て、利祿を求め、武人の生活に得堪へず、夙に、隱遁の志を決したるもの、名利の生活？ 眞の生活でないことを知るだけの素養を具へてゐるからである。彼れをして、單なる一介の武將たらしめるならば、彼れは、山水を娛しますして、利祿を樂しみ、花月を悦ばずして、功名を喜び、以て一生を終つたであらう。

斯くはいへど、あながち、山林に隱るゝには當らぬ。比叡の麓に詩仙堂を營む必要はない。吾等の自ら期する所、そして人に望む所は、能ふだけ、名利の念を

淡くして、多少とも、世外の情があり。古人の所謂る、

大隠は、市に隠る。

の趣きを、味解し得んことにある。人間、多少の隠心がなくてはならぬ。

二の二〇 俳人白雄明日を期せず

◇人は、たゞ、無常の身に迫りたることを、心にひしとかけて、束の間も、忘るまじきなり。「吉田兼好」

俳人春秋庵白雄、或る年の夏、平生、親交のあつた甘谷亭に逗留してゐると、越後の縮商人が来て、新織など、色々、取り出して見せる中に、一品、白雄の目に留まるのがあつた。主人の甘谷は、早くも、その様子を看取り、買ひ求めて「これは、貴坊へ進ぜやう」と、やがて、縫ひ上るのを待つて、白雄に贈つた。白雄は、非常に喜んで、早速、それを着た儘、脱がうとせぬ。甘谷が、笑ひな

がら、

「着て見られたら、脱いで置き給へ。御歸庵の曠れにも……」と注意すると、白雄は、

「否々、夏の蟬が、春秋を知らん所を見ると、私とても、明日を期することは出来ぬ。折角、御主人の厚志で、私へ下されたもの、着て心を慰めるのに、何とて歸庵の日を待ちませうや。」といつて、夜、臥するにも、更に、脱ぐことがなかつた。

甘谷も、雪中庵の門人で、漢文などを好み、素より、庸人ではなかつた。「成程、私が、悪かつた。その衣服が、それ程、お気に入つたのを、満足に思ひます。」といつて、白雄の心任せにして置いた。

明日を計り得ない人間が、明日を語り、來年を語り、十年、二十年の後を語るの、滑稽である。死ぬことを打ち忘れて、儲けても儲けても、儲け足らず、營利の途に遑々たる人を見る毎に吾等は、

やがて死ぬ、けしきも見えず、蟬の聲「芭蕉」の句を想ひ起す。

といふのが、

寝ねざれば、夜長く、疲倦すれば、道長く、愚かなれば、生死長し。「法句經」で、畢竟、その人の愚に歸する。

「名利に溺れて、先途の近きを顧みねば」(徒然草)

で、これに上越す愚はあるまい。

が、人間、明日を語らないわけには行かぬ。江戸ツ子は、宵越しの金を使はぬといふが、然うした極端な今日主義は、恐らく、人間の道ではない。

然らば、何としたものか。常々、「無常」の二字を念頭に置いて、明日を語り、將來を思ひながら、明日を期せず、將來を期しないに在る。「若し、命があつたら、」を頭につけて、明日を語る。「若し、生きてゐたら、」を前に置いて、將來を思ふ——斯くの如くであればよい。

一一の二 盲人の提灯

◇學んで思はざれば罔く、思うて學ばざれば殆し。「孔子」

夜に入つて、

「然やうなら！」と歸りかける按摩を呼び留めて、

「夜道は危ない。提灯をお持ちなさい。」と、主人がいふと、

「御戲言を！ 盲人に、提灯が要りますものか。」按摩は、調戲はれた氣である。

「否々、お前は、大丈夫だが、人が、打突かる。險呑だ。」

「成程々々！ 得て、目明ら、突き當ります。では、お借りして参りませう。」

と、提灯片手に、高足駄からころ、約そ五六町も行くと、果然、大衝突！ 按摩

は、大きに立腹して、

「危いッ！ 氣をつけろい。」と怒鳴る。相手も、負けてはゐず、

「其方で、氣をつけろい。どら盲め！」

「然ういふ貴様が、盲だらう。目明なら、俺に突き當るわけがない。この提灯が見えないかツ。」と、按摩がずつと差し出した提灯は、疾くの昔し、火が消えてゐた。

X

X

X

經には、

一切衆生、悉有佛性。

(一切の衆生、悉く、佛性を有す。)

の句があり、大乘起信論には、本覺、始覺の説であり、儒教でも、本性、本心を云々し、孟子には、

仁人の心なり。

孔子には、

仁、遠からんや。我れ、仁を欲して、仁、こゝに至る。

の語がある。皆、人間本來の性情が、善なるもので、たゞ、嗜慾のこれを蔽ふ。

が爲めに、乃はち、惡がある、といふのである。

こゝに於てか、いふ者がある。

「人は、本心に從ひさへすればい。學問は、無用の長物だ。俺なんか、曾つて、一冊の書を読んだこともないが、ちやんと、道を間違へずに通つてゐる。」といつて、威張りたがる。一應は、道現のやうであるが、再應は、甚はだ不道理である。

といふのが、人の本心は、成程、善なるものであらう。而も、嗜慾に蔽はれてゐる限り、學問の筈に依つて、嗜慾を拂ひ除け、修養の砥にかけて、私情の錆を研ぎ落すのでなければ、明晃々たる本心の光は顯はれない。

「思うて學ばざれば殆し。」

で、學問、修養に俟たない考へは、所謂、素人考へなるもので、大概は、獨りよがりである、獨斷である。そのいひ、その荷ふ所は、決して、本心の發露ではない。火の消えた提灯、火の消えた本心は、以て、道を照らすに足らぬ。それを明るい心得で持ち歩く按摩了簡は、世にも危険の至りである。

一一の二 駱駝の皮剥ぎ

◇諸苦の因る所、貪慾を本と爲す。「法華經」

久しく、王の家に仕へてゐた男、追々、年を老り、お暇を頂くことになる、王様は、可哀さうに思はれて、一匹の死んだ駱駝を與へられた。

男は、それを持つて歸つて、皮を剥ぎかゝつたが、刃物がなまくらで、なかなか、抄取らない。ふと二階に砥石のあることを思ひ出して、上つては研ぎ、下りては剥ぎ、上つたり下りたりが數十回に及ぶと、足も、腰も、堪らない。大に考へた末に、苦しい目をして、駱駝を二階へ吊り上げて、

『うむ、これでよし！ 智慧も、出れば出るものだ』と、大得意！

すると、女房が、それと見て、

『軽い砥石を下さないで、重い駱駝を上げるとはお前さん、何うかしてるのね。』

男の愚は、憐れむべしであるが、然し、平生、我々のしてゐることが、恰度、

これではあるまいか。

我々は、年中、貪、瞋、痴三毒の捕虜になつてゐる。それには、それぞれ、期する所があるので、物を貪つて止まないのは、物を得て、満足しやうとするのである。瞋意の焰に身を焦すのは、相手に報うて、甘心せんとするのである。道理に昏くて、常の世を常住の世にしやうとするのである。而も、その事の不可能なるや、徒らに、我が心身を苦しむるに止まる。

寧ろ、退いて、貪る心を捨て、瞋りの火を消し、物の道理を知るに如かぬ。

□月すみて 雲みな空に 見えはて、

深山かくれを ゆくあらしかな

蒲生氏郷

一一の三佛の慈悲

◇今、此の三界は、皆是れ、我が物なり。其の中の衆生は、實に是れが子なり。

「法華經」

善男子よ、智者は、深く、一切衆生の生死苦惱の大海に沈没するを見て、救ひ濟はんと欲するが爲めの故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、邪路に迷ふも、示し導く者あることなきを見る。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、五欲の泥に臥して、出づること能はざるも、猶ほ、放逸なるを見る。是の故に、かなし 悲しみを生ず。

又た、衆生、常に、財物、妻子の爲めに纏縛せられて、捨離すること能はざるを見る。是の故にかなし 悲みを生ず。

又た、衆生、身と口と意とに不善の業を造り、多く、苦果を受けて、猶ほ、樂着するを見る。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、五欲を渴き求むること、渴して鹹水を飲むが如きを見る。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、樂を欲し求むと雖も、樂の因を造り、苦を樂はずと雖も、苦の因を造り、天の樂を受けんと欲するも、戒を具足せず。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、我々所なきに於て、我々所の想ひを生ずるを見る。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、生、老、死を畏れて、而も、更に、生、老、死の業を造作するを見る。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、無明の闇に處りて、智慧の燈明を燃すことを知らざるを見る。是の故に、かなし 悲みを生ず。

又た、衆生、煩惱の火の燒燃する所と爲りて、而も、三昧の定水を求むること能はざるを見る。是の故にかなし 悲みを生ず。

又た、衆生、五欲の樂の爲めに、無量の惡を造るを見る。是の故に、悲みを生ず。

又た、衆生、五欲の苦を知るも、之れを求めて息まざることに、譬へば、饑うる者の、毒飯を食ふが如きを見る。是の故に、悲みを生ず。

又た、衆生、佛の出世に値ひて、甘露の淨法を聞くも、受け持つこと能はざるを見る。是の故に、悲みを生ず。

又た、衆生、邪惡の友を信じて、終に、善知識の教へに追ひ従はず。是の故に、悲みを生ず。

又た、衆生、多く、財寶あるも、捨て施すこと能はざるを見る。是の故に、悲みを生ず。

又た、衆生の耕田し、種作し、商賈し、販賣するを見るに、一切、皆、苦なり。是の故に、悲みを生ず。

又た、衆生の父母、兄弟、妻子、奴婢、眷屬、宗室、相愛念せざるを見る。是の故に、悲みを生ず。

佛の慈眼の見る所、我を衆生は、斯くの如くに憐れむべきものである。而も、自ら、その憐れむべきを知らないに於て、衆生の憐れは極まる。憐れむべきかな！

一一の二四 石川丈山舊を忘れず

◇學者、世事に疎し。「日本俚諺」

隱棲後の石川丈山は、山水、花鳥を友として、風吟、自ら樂しみ、復た、兵革を口にしなかつた。人があつて、昔の戰爭談を尋ねると、
「俺も、年を老つて、記憶がない。古い事は、皆な、夢のやうぢや。」とばかり答へたが、前日の勇士、雄心の依然たるものがあつて、林春齋が、丈山の九十を賀した序には、

夫れ、利刀、枕に傍ひ、弓銃、側らに在り。則はち、山林に在りと雖も、未だ、士の素を忘れざるなり。

桐江山人の偶書する所には、

輓近の高尙石大拙翁、洛北四明山下に隠れ、出行する毎に、僮僕をして、月刀を擔ひて、これに隨はしむ。

など見えてゐる。又た、詩を作つて、

枕刀三尺劍。瓶裏一枝梅。

(枕刀、三尺の劍。瓶裏、一枝の梅。)

といつたり、平生、竹の節の大如意を弄んで、

腰間無寸鐵。胸裏揮三三軍。

(腰間、寸鐵なし。胸裏三軍を揮ふ。)

といつたりしたのを見ても、心、常に、天下を存した武士根性が窺はれる。丈山、決して、尋常の腐儒ではなかつたのである。

X X X

今も、昔も、學者の仕事は、眞理を探究するに在る。その、世事に疎いのは當然で、交際上手、金儲け上手の學者は、恐らく、眞の學者ではない。然ればといつて、學者も、世外の人ではない。社會の一員として、これ等の人々の間に棲息する以上、これが爲めに憂ひ、これが爲めに計るのは、應に然るべき所である。眼中、國家なく、民人なくして、眞理の探究に没頭するといふならば、その學者は、恐らく、死學者であらう。その學問は、多分、死學問であらう。今の學者の學問は、生彩の、能く、人の目を惹くに足るものがないのは、何故か。學者たる者、思はなければならぬ。

一一の一五 蒲生氏郷の名言

◇人叱る、人は炬燵に、樂寢かな。「古句」

蒲生氏郷は、平生、配下に教へて、

「自ら、將となつて、戦陣に臨む者は、身を以て、衆を率ゐる心がけがなくてはならぬ。後方の、安全な場所にて、進め、進めと、下知したとて、士卒は、決して、進むものではない。士卒を進めやうと思ふ處迄、先づ、自分が進む。斯くてこそ、士卒も、これに後れじと、勇み立つて、進むのぢや。」といった。

いつたばかりではなく、又た、これを實行した。氏郷の軍が、戦ふ毎に、勇武絶倫の名を馳せた所以、怪しむを要せぬ。

武將のみではない。人を指揮し、人を使役する者は、常に、「身を以て率ゐる」の覺悟がなくてはならぬが、大概、口を以て率ゐる、その身は、無精をきめてゐる。「人叱る、人は炬燵に、樂寝かな。」で、行火に寝そべりながら、女房や店の者を怒鳴りつける。そして、幸ひに、商賣が繁昌すると、自分一人の功でもあるやうに思ひ做すに至つては、女房や店の者こそ、いゝ面の皮である。そんなことで人、決して、意の如くに使ひ得るものではない。

生徒には、品行方正を教へて、自分は、不身持ちを極める教育者、患者には、

養生の理屈を説いて、自分は、不養生勝ちな醫者、他人には、信仰を勧め、自分分は、露、信仰のない僧侶、牧師、貧乏人には、勤儉を宣傳して、自分は、榮華を事とする金持ち、國民には、その思想の悪化を云々して、自分は、悪化の種を蒔く政治家、皆、そのお仲間である。戒しめなければならぬ。

一一の二六 旅人剽盜に出遇ふ

◇人を見て、法を説け。「日本俚諺」

二人連れの旅人が、廣い野原の真ん中で、大勢の剽盜に出遇つた。さあ大變と一人は、急ぎ、叢の中へ隠れたが、他の一人は、逃げ遅れて、手もなく、剽盜に捕まつてしまひ、衣服を剥がれやうとすると、

「あゝ、待つて呉れ。」と押し止めて、

「この衣服は、世界に二つとない立派な衣服だ。お前方にやるわけには行かぬ。

その代り、この指輪を渡す。白金で、而も、金剛石入りだ。膺せ物ではない。若し、疑ふなら、あそこに、寶石商人が隠れてゐるから、一應、尋ねて見るがよい。」といふ。剽盜共は、からからと大笑ひして、

「貴様は、近頃、珍らしいうつけ者ぞ」といひながら、その指輪を受け取り、「それ程貴重な衣服を、商賣柄、見捨てることが出来るか。」と、衣服も剥いだ上に、叢に隠れた寶石商の衣服から持ち物、寶石類一切を奪つて、悠悠と立ち去つた。

人は、勿論、正直でなければならぬが、事柄にもよる、相手にもよる。秘すべきを秘するのは、不正直ではない。

嘘も方便、「日本俚諺」
といふ場合がある。「人を見て、法を説く」のも、蓋し、處世の手段に相違はない。

但し、用もないのに、事を糞秘しにし、一から十迄、嘘ばかりをいつて、眞實

一一の一七 多慾と少慾

◇多慾の人は、利を求むること多きが故に、苦惱も、亦た多し。「遺教經」

「佛言く、汝等比丘、當に知るべし。多慾の人は、利を求むること多きが故に苦惱も、亦た多し。少慾の人は、求むることなく、欲する所なければ、則ち、この患ひなし。是の故に、苦を離るゝのみなるも、尙ほ、應に、少慾を修習すべし。況んや、少慾の、能く、諸の功德を生ずるをや。少慾の人は、則ち、諂曲ひて人の意を求むることなく、復た、諸根の爲に、牽かれず。少慾を行ふ者は、心、則ち、坦然として、憂ひ畏るゝ所なく、事に觸れて、餘りあり。常に、足らざることなし。少慾なる者には、則ち、涅槃あり。」(遺教經)

X
X
X

家業に精出して、せつせと金を儲ける者、必らずしも、慾が深いのではない。儉約を勤め、質素を守り、貯蓄を心かける者、決して、多慾なのではない。多慾と少慾とは、金に囚はれると否とによつて岐れる。金に囚はれる者は、金の奴隷となり、金に使はれて、金の爲めに、自ら苦しめ人を害ぶ。貪慾の徒は、それである。吝嗇の輩は、それである。金に囚はれない者には、然うした弊のないは勿論、時宣次第、必要次第、惜しけなく、その金を使ふ。世の爲めに、人の爲めに、善を施して、吝しむ所がない人は、その人の、多々益す、金を儲け、金を貯へることを望むであらう。即ち、金に囚はれる者を、多慾とし、金に囚はれない者を、少慾とする。

—戒慾三題—

- 諸苦の因る所、貪慾を本となす。 法 華 經
- 心を、養ふは、慾寡きより善きはなし。 孟 子
- 貪慾は、悪にして、愚なり。 グ レ プ キ ル

一一の二八 某侯の鑑定眼

◇磨いたら、磨いただけに、光るなり、性根玉でも、何の玉でも。「古歌」

刀の鑑定に長じた或る大諸侯が、或る時、伺候した本陀彌光悦に、

「これは、相州の正宗ぢや。」といつて、無銘の古刀を示された。

本阿彌は、左視右視して、

「否、志津と見えます。なかなか、正宗ではござりませぬ。」と合點しなかつた

が、

「否、正宗ぢや。其方に預け置く。よくよく、研いで見よ。そして、正宗になつた時、返して寄越せ。」との言葉に、心得難くは思ひながら、

「では、お預り申しまして……」と、その儘、持ち帰り、せつせと研ぐ程に、追々、志津に似た所は見え出したが、何としても、正宗ではない。

然る程に、その候は、世を去られ、次の代になつてから、本阿彌が、罷り出て「お預りの刀は、界して、正宗になりました。今更、先殿のお鑑定のお強いのに何れも、恐れ入りました。何卒、お受け取り下されませ。」といつて、件の正宗を返し、家老たちが、

「して、その仔細は？」と尋ねると、

「不思議な事に、或る男の後生話から、正宗になりました。平素、手前共へ心易く出入する考人がござりまする。何時も、珠數を手にして、後生を願つてをりましたが、或る時、來ての言葉に、この頃は、後生の願ひ方を變へました。今迄は間違つてをりましたので、この荒凡夫の身で、俄かに佛にならう。と願つたと何の、佛になられやう。佛にならうとならば、先づ、善い人になるやうに願ふがよい。善い人になつてから、佛を願つたら、或ひは、佛になる便りもあらう。と氣づきましたと、そんな事を申すのでございます。手前は、それを聞きまして、成程、道理な事ぢや、あの刀も、直ぐ、正宗にしようと思つて研ぐから、却つて正宗にならぬのであらう、と氣がつき、一段近い志津にして見やうと存じまして

志津を志して研ぎますると、やがて、正宗に似て參りました。さてこそと、愈よ心を入れて、研ぎ上げました所が、到頭、正眞の正宗になりました」と語り、一同を感心させた。

× × ×

實語教に、

玉、磨かざれば、光なし。光なければ、瓦石たり。

と見えてゐる。磨けば光るものは、玉のみではない。得體の判らない古刀も、

本阿彌に磨かれて、見事、正宗たるの光を露はした。人の心も、磨けば光る。

智愚、聖凡、賢不尙、人様々の世の中であるが、その様々は、心を磨くと否とに因る。

性、相近く、習、相遠し。「孔子」

で、生れながらの人は、甲、乙、丙、丁、大概、同じことである。自暴自棄は宜しくない。心がけて、大に、心を磨くべきである。

所が、磨かない。といつて、人から、愚人扱ひにされるもい、や、自分の無學を

見られるもい、や。乃で、外見を飾りにかゝる。美衣美服を着飾り、堂々と押し出して、一廉の紳士になつた心得である。中味には頓着なく、たゞ、容器を奇麗にする。あたたら、正宗の名刀を持ちながら、これを磨くの勞を惜しんで、鞘や柄や鍔やの裝飾ばかりを立派にするのと、一般の愚である。

まことに、愚である。見かけが、如何に立派でも、磨かない正宗では、敵と戦ふに力がない。磨かない心では、事ある毎に、口開く毎に、愚を見はすの外はない。一時を欺くこけ威し、眞逆の時の用には立たぬ。

本阿彌を感じさせた老人の後生話には、一理があつて、二理がない。先づ、善人になつて、然る後ち、後世を願ふ、といふので、一應、道理に聞えるが、實は甚はだ不道理である。

人間、決して、善人にならうと思つて、善人になり得るものではない。苟くも善悪に見境ひが付き、善人の、遠く、悪人に優ることを知る者は、誰れも、善人になりたくは思ふ。成らうことなら、悪人ではゐたくない。如何せん、尋常一般の修養を以てして、善人になり得ないもの、これが、人間である。

孔子曰く、

仁、遠からんや。我れ、仁を欲して、こゝに仁至る。

と。孟子も

仁は、人の心なり、

といひ、彼の性善説を主張した。多分、中つてゐるであらう。けれど、荀子の性悪説にも、耳を傾くべき理由がある。善が、人の心に根本的のものである如く悪も、同様、根本的のものである。偶然の事情に依つて、一時、心に喰ついたといふ、そんなものではなく、もつと根深いもの、もつと根強いものであるらしい。古人も、

我が心、鏡にかけて、見るならば、嗚や姿の、醜くかるらん。「古歌」と悲しみ、

人の心は、悪魔の住家である。予は、往々にして感ずる、予の心中に地獄があることを。「トマス、ブラウン」

と嘆じてゐる。仔細に自心を静観する時、何人も、這般の嘆なきを得ないであ

らう。

人、善人にならうとならば、先づ以て、心中に頑張るこの地獄を攻略し、この悪魔を戮殺し、心に根本的な悪を克服し去らなければならぬ。何として、克服するか。我々人間に、然うした力のない事は、萬人の事實が、これを證明してゐる。各自の経験が、これを明示してゐる。自分の修養一つに依つては、人、決して、心中の悪を克服し、善人となり得るものではない。

こゝに於て、宗教がある。自ら、その悪を克服するに堪へない人も、神に依り佛によつて、これを能くすべき、自然、善人になることも出来る。

宗教は、以て、神、佛の力であるとする。實は、信仰の力である。信仰とは、この身、この我れを取つて、その対象たる、神なり、佛なりに打ち任せ、些か、我れを用ひ意である。即ち、無我である。

悪とは、何ぞ？ これを實際に徴して、我々の「我れ」に由来する。我々の五體內に戦ふ我見、我慾こそ、萬惡の因である。信仰が、無我を意味するならば、それは、畢竟、惡の原因を取り除くことである。即ち、惡を克服することであ

る。心中の地獄を攻略し、心中の悪魔を殺戮し、この心をして、それ等の束縛より解脱せしむることである。こゝに至つて、人間、善ならざらんと欲するも得んや、である。

よつて思ふに、必らずしも、神を信するといはぬ。將た、佛を信するといはぬ。要は、無我になるに在る。神、佛を信するのは、無我になる所以であるが、無我になる道は、獨り、神、佛の信仰のみではあるまい。宇宙を知り、人生を知る者は、又た、人間、元來、無我のものであることを知る。例へば、孟子の如くである。老子莊子の如くである。陸象山の如き、王陽明の如き、亦た、無我を知つた人である。達磨以來、累世の祖師は、亦、これを知つた人たちである。これを知り、これに向つて修養を加ふることが厚ければ、能く、無我になることが出来る。心中の惡を克服することが出来る。善人になることが出来る。

が、それは、容易の業ではない。常人に在つては、神、佛を信するのが、無我になるの最捷徑である。

果して然らば、本阿彌を感心させた念佛者の話は、一見、道理に似て、實は、

不道理である。善人になつてから、後生を願ふのは、順序を誤まつてゐる。後生を願へばこそ——佛を信じ、彌陀の他力に頼ればこそ、能く、無我にも、善人もなり得るのである。

前にいつた、心を磨くとは、單なる修養の意ではない、端的には無我になることである。神を信じて、無我になるもよい。佛を信じて、無我になるもよい。宇宙・人生の眞實相を縮観して、無我になるもよい。左に右、無我になつて後にのみ、人は、眞の善人になり得る。聖人といひ、君子といふ、皆、無我の人の意である。

一一の一九 西郷南洲逃げ礫を厭ふ

◇谷川の、水の清きも、朝夕に、流れ流れて、止まらぬ故。「愚佛」

明治六年、西郷南洲等が、征韓論に敗れたのは、主として、岩倉具視の沮止に

依る。その結果、南洲は、冠を掛けて、故郷鹿兒島へ歸ることになつた。板垣退助、副島種臣等も、南洲の同論者として、進退を共にすることになつたが、その憤慨は、譬ふるに物なく、具視を目して、

「君側の奸、除かざるべからず！」と敦圉き、これに一矢を酬ひんとして、南洲に謀つた。けれど、南洲は、たゞ一言、

「逃げ礫は、女々しい。」とばかり、飄然として退京した。

間もなく、臺灣征討の事があつた。征討軍に將として、彼の地に渡つた弟従道は、事果て、東京へ凱旋の途次、鹿兒島に立ち寄り、南洲の許に、數日を過した。その間、南洲は、種々、臺灣の事情、戦争の状況などを尋ね、感興、淺からざる様子であつたが、つひこの程の征韓問題には、一言のいひ及ぶ所なくして従道を送り出した。

喧嘩は濟んだ。敗けても、勝つても、左に右、濟んだ。今更、何と思つたとて仕方のあることではない。流れ去つた谷川の水は、元へ呼び戻すわけには行かぬ流るゝ儘に、流れさせて置くの外はない。強ひて、元へ呼び戻さうとしたり、濟

んだ喧嘩を思ひ返して、残念がり、口惜しがり、地團駄踏んで、尙ほ足らず、逃げ喋と出かけたなりするのは、まことに、女々しい。男子のする事ではない。男子のする事ではないが、大概の男子が、それをする。畢竟、執着の致す所である。小人、凡夫は、物に執着する。金に執着し、家に執着し、名に執着し、官位に執着し、金時計に執着し、女に執着して、華嚴の瀧の底、淺間の烟の中迄もと、女の尻を追つ駈ける。と同様に、過ぎた事にも執着して、濟んだ喧嘩に力癪を入れる。

けれど、男子は、さつぱりがよい。人に不法を加へられ、ば、怒りもしやう、喧嘩もしやう。けれど、それは、その場、その時限りの事で、過ぎての後は、萬事を水に流してしまつて、少しも、念頭に留めない——論語に、
伯夷、叔齊、舊惡を念はず。怨み、こゝを用て希れなり。
とある心持ちが、即ち、男子の心持ちでなければならぬ。

一一の二〇 夫婦無言の約束

◇小利を見れば、大事、成らず。「孔子」

戸棚を開けると、食ひ残りの大福餅が、三つある。夫婦で、一つづつ、食ふと、後に、一つ残る。

『二人に一つでは、都合が悪い。』と、黙りつ競の約束をした。最初、口を利いた者が負け。勝つた者が、彼の大福を食ふといふのである。

夫婦は、目ばかりばかりくりして、じつと押し黙つてゐる裡に、やがて、夜になり、寝る時刻が来ると、褥へ入つても、例のやうに寢物語がない。まるで、啞の夫婦見たやう!

所が、その夜、盗人が入つて、大風呂敷をおつ擴げ、其邊にある品物を、手當り次第、包みにかゝつた。夫婦は、やつぱり、無言の行者!

乃で、盗人の奴、飛んでもない考へを起し、

「この女、なかなかの美人だ。連れて行つて、嗅あにしよう。」と、いきなり、女房の手を執つた。亭主は、それでも、黙つてゐる。妻は、堪りかねて、

「泥坊々々！」と聲を立てた。盗人は、驚いて、大風呂敷を引つかつき、雲を霞と、逃げ去つた。

後で、妻が、

「たつた、一つの大福餅の爲めに、盗人を見て咎めないと、お前さん、餘まりだね。」と怨むと、亭主は、掌を拍つて、

「それ、お前が口利いた。餅は、俺のものだよ。」と、わんぐり、頬張つた。

X X X

「小利を見れば、大事、成らず。」といつた孔子は、又は、

小、忍ばざれば、大謀を亂る。

といつてゐる。我々は、小事に頓着して、爲めに、大事を誤まる場合が多い。

すべて、頓着は、宜しくないが、小事に頓着するのは、最も宜しくない。大福餅

位りに頓着して、女房を取られては、大變である。注意が肝腎！

一一の二 豊太閤の遊女屋覗き

◇男は裸百貫「日本俚諺」

豊臣太閤の馬の口取りの某といふが、請つて、京都柳の馬場に遊廓を設け、市中の遊女屋を一纏めにした。慶長中の事で、我が國遊廓の濫觸であるとか、その出来上つた時、太閤は、

「奇麗なものを見るか？」

「はい、随分と、をりまする。」

「では、檢分してくれう。」と、或る夜、頬冠りをして、一軒々々、遊女屋を覗き廻つた。

又た、或る時、御所の能狂言へ来る途中、女、子供の集まつてゐるのを見ると

馬上から、

『お能があるぞ。皆な、見に来い、見に来い』と聲をかけながら通つた。

太閤には、この類の逸話が、澤山ある。少しも、氣取るといふことがなかつたらしい。

小人は、左右、氣取りたがる。偉さうに構へたがる。服装を飾り、態度を飾り堂々として押し出す所は、猿芝居の殿様を見るやうで、何とも、滑稽の極みであるが、御本人は、一種の紳士になつた心組である。

猿にも衣裳、「日本俚諺」

といふが、口善悪ない京童は、

『おや、あそこに衣裳があるよ』と、こんな悪口をいはうも知れない。

尤も、そこに、同情すべきものがないではない。人に立てられたい、偉く見られたい。悲しいかな、偉く見られる程の學問もない、技藝もない。理想もなければ、信仰もない。宇宙觀の、人生觀のといふことは、語の意味からが解らない。

結局、

『よし服装で胡麻化してやらう』といふことになるのであるが、胡麻化すといふこと、なかなか、樂ではない。肩も凝らう、脊も痛からう。偶ま、識者に會してはらはらすることもあらう。人間、氣取り屋となる、亦た苦しからずやで、まことに、同情の至りである。

同情の餘り、

『そんな氣取りは、止し給へ。そして、樂になり給へ。』と、忠告してやりたいが氣取り屋から、氣取りを取り去れば、残る所は、零である。零であればこそ、氣取るのである。この忠告は、無駄であらう。

零であるから氣取る。取柄のない者程、服装を飾り、態度を莊重にしたがる。眞に偉い者は、偉がりもしなければ、氣取りもしない。頬冠りをしやうが、肥桶を荷はうが、西郷南洲のやうに、カフスを倒まに着けやうが、藁草履で歩かうがその偉いことに於て、差支はないからである。氣取る所に、小人の小人たる所以が在り、氣取らなかつた所に、豊太閤の偉さが在る。面は、猿に似てゐるか知ら

ぬ。彼れ、決して、猿芝居をしなかつたのがあり難い。

一一の三三 太閤の應對ぶり

◇大佛は、外いかめしく、見ゆれども、叩いた音が、内はからから。「古歌」

立花宗重が、御機嫌伺ひとして、大阪へ来た。臺に載せた白銀百枚は、即ち太閤への進物である。一室に控えてみると、突然、奥から、太閤を眞つ先に大勢の人が、騒々しく、走り出した。帯もしだらな太閤の後ろには、太刀を捧げた、尼の孝藏主がある。乳人に抱かれた秀頼もある。一體何事が起つたか。

それは、秀頼の慰みに飼つてあつた雀が、籠を逃げたのであつた。太閤は、忽ち、宗重を見て、

「お、左近將監か。これは珍らしい。」
「お見舞に上りました。」

「太儀！ 太儀！ この銀子を土産とな？ 過分に思ふ。」といつて、その一枚を取り、

「改めて、残りをその許に進げる。京都は、面白い處ぢや。ゆるゆる見物して歸られよ。」とばかり、奥へ消えた。

こゝにも、太閤の氣取らなかつた一例を見る。

小人の小人たる所以は、その、好んで氣取るに在つて、氣取れば氣取る程、小人たる所以を明白にする。大人の大人たる所以は、その、少しも氣取らないに在つて、無頼に振舞ふ程、その偉い所が判然する。

見かけ倒し。「日本俚諺」
は、何にもならない。人は、實質のこと！ 實質のこと！

□日もくれぬ 人も歸りぬ 山里は
峯の嵐の音さへもなし。

二の二三 食はずに生きる奇術

◇財布の底を拂ひてからの儉約は、既に遅い。「セネカ」

或る大名、多年、贅澤に暮して来た報ひは靦面、火の車が廻り出して、二進も三進も行かなくなると、家來を集めて、
「斯うなつては仕方がない。今後は、極度に儉約するから、その方共も、我慢するやう。」といひ渡した。

その後、成程ひどい。食事など、大名だけに、膳、椀、皿、小鉢、何れ、綺羅びやかな品ばかりであるが、ついてゐるのは、鯛の干物が關の山で、それもほんの一口だけ！ 錦手の皿を見つめては、すつ、ほり飯をやるのであるから、殆んど喉へも通らない。
家來の中に、

「こんな物を食はされてゐたぢや、今に、我々が、干物にならあ。」と呟く者があると、給仕の女中、氣の毒げに、打ち眺めて、

「だけど、御心配なさいますな。殿様は、智慧のあるお方ですもの、きつと、新奇術をお考へになりますわ？」

「どんな奇術かね？」

「定つてまさあね、食ふ物なしに生きてゐられる奇術ぢやありませんか。」

贅澤の後に、貧窮の來るのは、晝の後に、夜が來るのと同様、見え切つた話であるが、利功か、馬鹿か、得體の知れない人間は、さんざ、贅澤を仕盡して、貧窮のどん底へ落ちてから、漸く、それと氣がついて、俄かに、儉約を始める。
が、時、既に遅しである。財布の底を拂つてからは、最早、儉約の仕様もない多少でも、金のある中なら、それを資本に、金を儲け、儉約に、儉約にと心がけて、細々ながら、やつても行かれやう。無一物では、第一、命が續くまい。それこそ、食はずに生きる奇術でも考へるの外はない。

何事にも、時がある。手遅れになつた病人は、名醫も、匙を投げる。手遅れになつた貧窮は、儉約の薬も効かない。詩經に、
天の、未だ、陰雨せざるに迫んで、彼の桑土を徹り、牖戸を網罅す。
とあつて、無智の小鳥にも、先見の明、能く、將來の變に備へる。人間を以て小爲に當るは如何？ 贅澤家も、大概の處で、目を覺すべきである。

一一の二四 勇のさまざま

◇世に義人なし。一人もなし。『聖書』

「狗彘の勇なる者あり。賈盜の勇なる者あり。小人の勇なる者あり。士君子の勇なる者あり。飲食を争つて、廉耻なく、是非を知らずして、死傷を辟けず、衆彊を畏れず、忤々然として、唯だ、飲食を之れ見る。是れ、狗彘の勇なり。事利の爲めに、貨財を争ひ、辭讓なく、果敢にして、振、猛貪にして戻、忤々然として

唯だ、利を之れ見る。是れ、賈盜の勇なり。死を輕んじて暴。是れ、小人の勇なり。義の在る處、權に傾かず、其の利を顧みず、國を擧げて、之れに與ふるも、改視を爲さず、死を重んじ、義を持して撓まず。是れ、士君子の勇なり。『荀子』

X X X

智と仁と勇と、これを三徳といふ。三徳の一なる勇である。その美徳たるに論はないやうであるが、又た、一概に美徳とし難い理由もある。何か。

三徳は、三であつて、一である。三位一體、互ひに相俟ち、相協同して働く時にのみ、その美徳たる所以が見られる。

例へば、智、仁を缺いて、奸となり、勇を缺いて、行はれぬ。仁、智を缺いて、婦人の愛となり、勇を缺いて、亦た、行はれぬ。

と同様に智、仁を缺く所の勇は、不具の勇である。似て非なる勇である。僞勇である。

荀子數ふる所の四勇中、食に勇なる狗彘の勇、利に勇なる賈盜の勇、死を輕んじて暴なる小人の勇の三は、皆、僞勇である。その、僞勇たる所以は、他の二

徳、智、仁を缺くに在る。義に勇なる士君子のみが、三徳兼具の眞勇であつて、勇の美德たる所以、こゝに、初めて、明白である。

が、今日、斯うした眞勇は、滅多にない。若しあるならば、社會は、斯く迄、墮落しなかつた筈である。狗彘の勇はある。賈盜の勇はある。小人の勇はある。滔々たる者は、皆、この種の勇者である。義に勇なる眞勇は、これを索むるに由がない。

されば、勇、必らずしも美德ではない。三徳の一といふに欺かれて、たゞ、勇であればよい、と思つたら、それこそ大變、大間違ひ、飛んだ悪黨を造らうも知れない。聖人孔子も、

勇を好みて貧を疾むは、亂なり。

と、勇の弊害を指摘してゐる、志を精神の修養に存する者は、篤と自ら、戒しめなければならぬ。

一一の二五 前田利常の大罨丸

◇己れを屈して、富貴ならんよりは、志を抗げて、貧賤なるに若かず。

「孔子」

加、越、能、百萬石の家を保つ爲めに、前田利常は、鼻毛を伸ばして、愚人を装ひ、幕府の猜忌を免れたといふが、又た、こんな話がある。

何か、不快の事があつて、久しく、登城しないであつた。利常、後ち、城内で酒井忠勝に出遇ひ、

「近來、拜面致さぬ。御氣隨でも出ましたか」と問はれると、

「何う致して！ 某、老年の爲めか、近來、疝氣が起つて、これ、この通りでござる。」といつて、前をまくつて、腫れ上つた大罨丸を見せた。居合す一同、大笑ひをしたとか。

徳川時代の三百諸侯中には、善治を以て、名君の名を得た人も、間々あつた。その大部分は、所謂「馬鹿殿様」なるもので、酒色に耽る以外、何等の能もない、愚物揃ひであつた。藩政を擧げて、重臣に委したのは、自然の成行である。が、さて、その重臣なる者、大石内蔵助に似たのは少く、大野九郎兵衛の亞流が多く、十人に九人迄は、苛煩誅求、領民を苦しめるのを、政治の要道かに心得た。

苛政は、虎よりも猛し。「孔子」

といふが、各藩の政治中、苛政ならぬものは、殆んどなかつた。

その反映として現はれたのが、百姓一揆である。百姓一揆の頭目たり、犠牲者たる義民である。

が、相手は、諸侯である。烏合の衆なる百姓一揆が、これに對して、何事かを爲し得やう。

蟻螂の斧、龍車に向ふ。

で、忽ち、蹴散らされ、踏み散らされるが落ちであつた。

それ程、領民に威勢張つた諸侯も、幕府に對しては、猫の前なる鼠と一般。極めて無小な、意氣地のないものであつた。「戦々兢兢、薄氷を履むが如く、深淵に臨むが如く」(詩經) くして、幸ひに免れんことをこれ努めた。

その戦々兢兢をふりは、前田利常の例を見ても判る。彼れ、百萬石の大諸侯を以てして、鼻毛を伸して足らず、衆人稠坐の中で、大擧丸を披露に及んだ。斯くの如きは、市井の商賈、畝の農夫も、尙ほ、忍び得ない所であらう。

といふのが、家を思つたからである。苟くも、家を保ち得んが爲めには、辱を蒙り、垢を含み、犬となり、猫となり、牛となり、馬となつて厭はなかつた者。これが、當時の諸侯である。武士の體面が、どこにあらう？ 男子の面目が、どこにあらう？ 擧九の手前も恥づかしい。利常の大擧丸、或ひは、女子の擧丸ではなかつた。

かそれにして、恐ろしいのは、慾である。家を思ふ慾の爲めに、利常は、男子の爲し得ざる所を爲した。今の人も、慾の爲めに、意地を忘れ、利の爲めに、

我慢を棄てる。それが、處世の妙策かも知れないが、抑も、男子の寧丸を如何？
尤も、

小、忍ばざれば、大謀を亂る。「孔子」

の語もあれば、胸に大謀を挟む者が、區々の屈辱を忍ぶのは、大人の量である。韓信も、股を潜つた。昔の諸侯は、怨の爲めに、寧丸を出したのである。今の人、は、利の爲めに、乞食の眞似をするのである。同日の談ではない。

一一の二六 伊達政宗の木刀

◇已れを屈すれば、人に制せられ、志を抗ぐれば、道に愧ぢず。「孔子」

伊達政宗は、勇もあり、略もあり、なかなかの傑物であつただけに、豊太閤以來、油断のならない曲者を以て目せられた。政宗自身も、それと知つて、充分警戒し、前田利常同様、勉めて幕府の猜疑を免れやうとした。その言行には、往々

人意の表に出るものがあつた。

最も不思議は、その政宗が、寸の伸びた脇差を帯して、登城することであつた。城内では、一般に、短いのを帯したもの、自然、政宗の長脇差が問題になつたのである。

すると、狸爺の政宗は、或る日、故意と脇差を脱して、厠へ行つた。豫ねて疑問の長脇差とて、一二の諸侯が、そつと抜いて見て、

「これはこれは……」と一驚した。たゞの木刀であつたのである。

傑物か、英物か、勇名、東北を壓した獨眼龍も、これでは、甚はだ下らない。

その、利害を計量して、算に遺漏なく、人意を村度して、巧みに詐術を弄んだ所は、殆んど、奸商以上である。彼れ、武士の魂なる腰の物を捨て、木刀を帯した。この時、内心、武士をも捨てたか。

左に右、昔の諸侯といふ者も、存外、下らなかつたのである。一國、一城の主といへば立派さうに聞える。その實は、駈引上手の商人と擇ぶ所がなかつたので

ある、その打算に明かな所など、到底、商人根性と變らなかつたのである。見かけや道具立てを見て、その人を想望すれば、大部分、中らない。而も、昔の大名の下らなかつた原因が、慾の一字に在つたとすれば、世に恐ろしいのは慾である。利である、金である。

二の二七 片意地五人男

◇君子は、和して同ぜず。小人は、同じて和せず。「孔子」

同氣相求むる片意地男が五人、同じ家に住んだのだから堪らない。毎日、意地を突つ張り合つてゐるが、或る時、不思議に意見が一致して、共同で、一人の婢を雇つた。

先づ、用事をいひつけたのは甲で、

『この襦衣を洗つて呉れ。』といふ。

『はいはい、』と洗つてゐる所へ、

『おい、この浴衣を洗へ。』といふのは乙。

『はい、洗ひますよ。』

『早く洗へ、早く、早く。』

『只今、これを洗つてますから、暫く待つて下さい。』

『馬鹿ッ！ 俺も、同じやうに金を出して、お前を雇つたのだ。甲のを先にする法があるか。』と怒る。

すると、丙が来て、

『金は、俺も、出してゐる。俺のを先にしろ。』といつて、寢衣を放り出し、婢が背かないと、大きに立腹して、ほかりとやつた。

丁、戌が出て来て、

『俺たちも、金を出してゐるのだ。お前が打つなら、俺も打つぞ。』といひざま、寄つて集つて打つたので、婢は、驚いて逃げてしまつた。後では五人の男裸夫に蛆が湧いて、大いに閉口したとある。

『君子は、和して同ぜず。』——君子は、善く、卑と和合して、決して、争ふことをしない。けれど、雷同はせぬ。義に據つて進退し、苟くも、不義と見れば、何人の言にも従はないで、たゞ、義を守り、已れを全うする。『小人は、同じて和せず。』——小人の行き方は、君子のそれと、正反對である。

雷同は、宜しくない。善不善、義不義に關はらず、輕卒に、他人の言に附和雷同するのは、獨立の判断を缺くのである。一己の識見がないのである。無論、避けなければならぬが、といつて、無闇に、自分の意地を張つたり、強ひて、他人に忤つたりするのは、一層、避くべきことである。これ、小人の情であつて、君子の心ではない。

君子は、争ふ所なし。『孔子』

何人とも争はず、何人とも和合するのが、君子の君子たる所以である。

小人が、他と和合し得ないのは、何故か。これを小人に問へば、

『吾輩には、骨がある。間違つた奴等は、片つ端から、跳け除けてしまふから……』

……』と、感張るであらう。その實、骨が硬いのではない。然うした小人に限つて、せつせと、權貴の門に伺候し、お餘り頂戴的の哀聲を發する。

それは、有我、我執の爲である。狹量の致す所である。人間が、利己的に出來てゐて、自分の主張を、一步も任せまいとする。さては、何人とも和合せず、廣い世界を、一人ほつちで、淋しく渡らなければならないのである。

小人が、有我、我執の塊りであるに對して、君子は、無我的人である。無我は大我である。大我は、廣量の極である。一切を包容して、衝突せんにも、その物が無い。魚の躍るに従ふものは、海である。鳥の飛ぶに任せるものは、空である。君子の人に於けるは、空の、鳥に於けるが如く、海の魚に於けるが如くである。

骨といふか、君子、素より、骨がある。鐵石さながらの骨がある。進退去就、一に義に據つて決定し、叨りに、雷同しないのは、これ、君子の骨である。彼の表に硬骨を裝つて、内に乞食根性を藏し、權勢、富貴の前に『首を俛し、耳を帖れ、尾を搖がして、憐みを乞ふ』(韓退之) 小人の骨とは、全然、種類を異にする骨、これが、君子の骨である。

君子の骨は、他人に雷同しない爲めの骨である。小人の骨は、衆と和合しない爲めの骨である。昔者、死馬の骨を千金に買った者はある。犬の骨、猫の骨、そして、小人の骨には、三文の価値もない、偶ま以て、折角雇つた婢を失ひ、男鯨夫に蛆が湧く、『日本俚諺』位が、落ちである。

一一の二八 塞翁喜憂せず

◇人間萬事塞翁が馬「日本俚諺」

「塞上に近き人、術を善くする者あり。馬、故なくして亡けて胡に入る。人、皆之れを弔す。其の父曰く、此れ、何ぞ、遽かに、福とならざるを知らんやと。居ること數月、其の馬、胡の駿馬を將るて歸る。人、皆、之れを賀す。其の父曰く此れ、何ぞ、遽かに、禍とならざるを知らんやと。家、良馬に富む。其の子、騎を好み、墮ちて其の髀を折く、人、皆、之れを弔す。其の父曰く、此れ、何ぞ、

乃はち、福とならざるを知らんやと。居ること一年、胡人、大に塞に入る。丁壯の者は、弦を引いて戰ふ。塞に近きの人、死する者十に九なり。此れは獨り、跛たるの故を以て、父子、相保つ、故に、福の、禍となり、禍の、福となるは、化極むべからず、深、測るべからざるなり。(淮南子)

吉凶、禍福、苦樂、幸不幸は、皆、相對的のものである。吉があれば、凶があり、凶があれば、吉がある。乃至、幸があれば、不幸があり、不幸があれば、幸がある。二者は單獨に存するものではなく、一のある所、必らず、他がある所、必らず、一がある。それは、『必らず』である。譬へば、仲の好い兄弟の如くに、朋友の如くに、袂を連ねて、人を見舞ひ、決して、相離れることがない。

であるから、樂を求めるのは、苦を求めるのである。幸福を願ふのは、不幸を願ふのである。

金のない者は、金があつたら……と思ふ。けれど、泥坊の心配、貸し倒れの苦

勞、親類の無心、知人の貸してくれに胸を痛める金持の苦勞は、貧乏人の知らな
い所である。持つことがあれば、失ふことがある。預けた銀行が潰れたり、商賣
の見込みが外れたりして、十萬の身上か、五萬に減る。減つても五萬ある。これ
を貧乏人から見れば、まだまだ、大した金持ちであるが、金持ち自身は、青息、
太息、五色の息、柄にもなく、世の無常を感じて、

「寧ろ、死んで除けやうか。」といふやうな氣にもなる。

家を持つてば、火事の心配、衣裳を持つてば、虫干しの世話、なかなか、樂ではな
い。

獨身者の目に、女房持ちは、幸福である。女房の遊みツ面、夫婦喧嘩の苦みは
獨身者の知らない所である。

子のない者は、子を欲しがらる。子を持つた苦勞は、又た格別で、暑いにつけ、
寒いにつけ、雨にも、風にも、暴風雨にも、肩の休まる時がない。古歌に、

子を思ふ、親の心の、四つ手駕籠、しばし休まん、息杖もなし。

といふもの、これである。これが、何の、樂しからう？まことに傷ましい犠牲

である。

以て、知ることが出来る、樂を求めるのは、苦を求めるのであり、幸福を願ふ
のは、不幸を願ふのであることを。

樂を求めるのが、苦を求めるのであるならば、苦を得るのは、樂を得るのであ
る、幸福を願ふのが、不幸を願ふのであるならば不幸に沈むのは、幸福に浮ぶの
である。

苦樂といひ幸不幸といふの、到底、相對的のものであつて、兩々、決して、相
離れないのは、斯くの如くである。まことに

禍は、福の倚る所、福は、禍の伏する所、「老子」
である。

運命の循環は、水車よりも速い、「ドン、クキゾー」
である。

喜憂兩地の間に駕せられた橋は、長くはない、「獨逸俚諺」
である。「福の禍となり、禍の福となるは、化、極むべからず、深、測るべから

ず。』である。

であるから、吉も、喜ぶに足らぬ。凶も、憂ふるに足らぬ。乃至、幸も、賀するに足らぬ。不幸も、悲しむに足らぬ。喜ぶ者は、憂ふる者である。賀する者は悲しむ者である。如何なる運命の、來り見舞ふに會しても、能く、平静を保ち、悲喜の情を動かさない。これを達人の態度とする。

一一の二九 細川忠興の妻

◇良妻と健康とは、人間最上の財寶である。「英國俚諺」

細川忠興の妻は、明智光秀の娘である。父が謀反を起した時、夫に向つて、「父ながら、斯やうの企て事、よくなられやうとは思ひませぬ。瀧川、柴田などいふ人も、數多、をられること故、結局、敗軍の外はござりますまい。女の淺い智慧にも、淺猿しう存じまする。男の身ならば、鎧の袖に縋つてでも、お諫め申

すのでござりますが、女の身には、力が及びませぬ。良人も、父にお味方なさるなら、世の譏りも、如何かと存じまする。篤と御了簡なされませ。」と、涙に沈んだので、稍や心の動いてゐた忠興も、遂に、光秀に與しなかつた。

『夫唱婦隨』といふ。又た、『三從』といふことがある。大戴禮に、孔子の語として、

婦人は、人に伏するなり。この故に、專制の義なく、三從の道あり。家に在つては、父に従ひ、人に適いては、夫に従ひ、夫死しては、子に従ふ。敢へて、自ら遂ぐる所なし。

と見えてゐる。女の道は、所謂、服從の二字に在る、とするのが、古來の定説である。

が、所謂服從は、盲目的に従ふのではない。盲從するのではない。已れの判斷に任せて従ふべきに従ふのである。盲從ではなくて服從である。

將た、壓屈され、餘儀なくされて、心ならずも従ふのではない。寧ろ、自發的

に、我れから進んで従ふのである。

といふのが、女子も、人格を備へてゐる。一個獨立の人である。盲従は、獨立の人のすることではない。盲従は、人格の觀念と矛盾する。夫唱婦隨とか、三従とかいふ語は、今の人の耳に、餘り、快くは響かないやうである。殘に、新らしい女などは、

『女を奴隸扱ひにする。女だつて、獨立の人間だ。人を馬鹿にしてゐる。』と怒る。畢竟、盲従といへば、直ちに、盲従、盲従を意味することと誤解して、金切り聲を張り上げるのである。夫唱婦隨決して、妻に盲従を強ひるのではない。三従決して女に盲従を迫るのではない。たゞ、盲従が、女の道であることをいつた迄で人格が何うか、獨立が斯うのと、それは全然、無關係の議論である。

宗教信者は、神に盲従する。それが、何の、人格を無視することにならう？ 何人も、道德法に盲従する。それが、何の、獨立の人たるを妨げやう？ それは、人格を備へた獨立の人が、自ら進んで、盲従するのである。盲従ではない。盲従ではない。

勿論人は、さまざまである。

廣い世の中、夫の命の儘に、盲従し、盲従して、殆んど、奴隸の境界に在る妻も、多々あらう。罪の一半は、夫の没分曉に在つて、他の一半は、妻の暗愚である。夫の考へる所、いふ所に、是非の判断を加へることも出来なければ、自分の一進一退を、自分で決することも出来ない。それ等は盲従も、己むを得ぬ。盲従が、分である。

であるから、盲従を道とする女は、大に、精神を修養し、大に、智徳を養成して、事理の一通りは、これを正解して誤まらないだけの實力を備へるのでなければならぬ。

例へば、細川忠興の妻明智氏の如くである。斯くてこそ、盲従、盲従の奴隸境界を脱出して完全に、夫唱婦隨、三従の道を行ふことが出来る。修養は人格の基礎である。實力は、獨立の根柢である。

又、細川忠興の妻に、就いて敬服に堪へぬのは、そればかりではない。權貴に屈せず、固く、身を以て、貞節を守つたことである。

或る時豊太閤が、諸侯の妻を伏見城へ招いて、親しく、饗應した。細川忠興の妻は、斯くと聞くと、

「女の身として、たゞ一人、一間へ入つて、他人に見える法はない。若し、自分をも召されるとなら……」と、心中、深く、決する所があつて、懐剣を用意した。

爾來、太閤の悪戯は止んだ。

秀吉が、諸侯の妻を請待したのは、表面、好意に出て、實は、一種の悪戯であつた。

英雄、色を好む。「日本俚諺」

といふのが、古來の通り相場ながら、他人の妻を弄ばうとは、ちと、厳し過ぎる、亂暴にも、程がある。

急に、勢ひを得た者は、その勢ひに乗じて、往々、非常識な事を思ひつく。秀吉の大人物を以てして、尙ほ且つ、その弊を免れなかつたか。これ、成金輩の好

鑑戒である。

若しそれ、忠興の妻の貞烈に至つては、古今獨歩といつてよい。返す返すも、敬服に堪へぬ。

二の三〇 孟敏鍋を落す

◇解説とは、束縛を離るゝ義なり。「解説道論」

後漢の時、鉅鹿の孟敏は、土鍋を荷つて、地へ落とし、振り向きもしないで、行き過ぎた、通りかゝつた太原の郭泰が、

「おいおい」と呼び留め、

「お前、鍋を落したぢやないか。」

「はい、落しましたよ。」

「振り向きもしないのは、可怪しいね。」

「鍋は、割れたのです、それを見たとして、何にもなりません。」との言葉に、郭泰は大に感心して、勧めて學問をさせた。

割れた土鍋、顧みたとて、何にならう？何にもならないが、尙ほ且つ顧み、足を止め、破片を拾つて、糺ぎ合せて見るのが、普通の人情である。一般には、未練といつて嫌ひ、佛教では、執着と名けて、地獄の種とする。

執着とは、この心が、物に止ることである。こびりつくことである。物の爲めに、囚はれることである。束縛されることである。物の捕虜になるのである。物の捕虜になる者は、地獄へ落ちる。財産の捕虜になる者は、財産の爲めに、命を捨てる。利害の捕虜になる者は、利害の爲めに、道を忘れる、名譽の捕虜になる者は、譽められて、有頂天に喜び、毀られて、奈落に沈む。地位の捕虜になる者は、暮夜、上官の臺所口へ廻る。女の捕虜になる者は、華嚴、淺間へ心中と出かける。何れ、祿なことはない。

であるから、我々は、物の束縛を脱し、その捕虜たることより免れなければならぬ。

らぬ。即ち、解脱しなければならぬ。

何として、解脱するか。弟子あり、解脱の道を問ふ。師の僧、答へて曰く、「誰れが、お前を縛つたか」と、誰れが縛つたか、誰れが縛つたか。物が縛つたといふけれど、實は、慾が縛つたのである。解脱の道は、たゞ、慾を棄てるに在る。

何として、慾を棄てるか。これ、靜思すべき大問題である。

遮莫、我々は、解脱しなければならぬ。解脱した後こそ、眞の自由がある。縦横自在に、いひ且つ行ふことが出来る道徳といふも、仁義といふも、解脱以後の事である。土鍋にさへ束縛せられ、區々たる名利如きの捕虜になつてゐる小人に、何の自由があらう？何の人格があらう？仁義、道徳などは、口にするさへ、烏澁がましい。

一二の命と格別

◇ 信言は、美ならず。美言は、信ならず。「老子」



「田舎の事で、何もありません、豆腐を煮ましたが、お口に合ひますか知らず？」といつて、細君の進めた膳に内心、大に困りながらも、例の世辭家として、
「否、結構ですよ。豆腐は、私の大好物で、それこそ、命です、滋養になつて、實に衛生的の食物ですからねえ。」と、答へ、やつとの思ひで、一皿だけを平け、
「何卒お替りを……」
と、いはれるのを逃げるやうにして退却した男、後再びその家へ行くと、今度も、豆腐が膳に上る。たゞあり難いことは

牛肉が入つてゐるので、客は、牛肉を捜しては食ひ、豆腐にはさつぱり、箸をつけない。主人は、不思議さうに見てゐたが、

「貴方、些とも、豆腐を食ひませんか？ 過日、豆腐は命だつて、仰しやつたやうですが……」と尋ねると、

「豆腐は、眞實、私の命ですがね、けれど、牛肉は、又た格別で、これを見ますと、もうもう、命も何も要りません。」

他で饗應になる。不味い物でも、旨いと賞め、嫌ひな物でも、好きと悦ぶのは先方に満足させるわけで、一種の慈善事業かも知れないが、何事にも、程度といふがある。度に過ぎて賞め、度に過ぎて悦ぶのは、宜しくない。

といふのが、「信言は、美ならず。」——眞實、己れの本心から出た言葉は、相手の手に、然迄、快く響くものではない。「美言は、信ならず。」——若し、聞く耳に、快い言葉ならば大概、美しく飾り立てた言葉で、勿論、本心から出てゐない。それは、畢竟、嘘なのである。先方に満足させやうといふ、その衷情は、然

ることながら、賞め過ぎる言葉、悦び過ぎる言葉は、老子の所謂る美言であつて即ち、嘘である。

嘘も、嘘たることの曝露しない中は、眞實として通用する。賞め過ぎ、悦び過ぎるのは、嘘の嘘たることを曝露する所以で、賞めたが、賞めたにならず、悦んだが、悦んだにならない。若し、寛大な相手ならば、滑稽としてたゞ、一笑に附するであらう。一國な相手ならば、

「人を馬鹿にしてる」と、立腹するに相違はない。

今の世には、世渡り上手の世辭家が多い。御注意迄に、敢へて、一言を呈して置く。

二三の二橋本左内の立志訓

○仁に志せば、悪しきことなし。「孔子」

「志とは、心の之く所にして、我がこゝろの向ひ赴き候處をいふ。士に生れて、忠孝の心なきものはなし。忠孝の心、之れ有り候て、我が君は御大事にて、我が親は大切なる者と申す事、聊かにも合點のき候へば、必らず、我が身を愛重して、何ぞ、我れこそ、弓馬、文學の道に達し、古代の聖賢、君子、英雄、豪傑の如く相成り、君の御爲め働き、天下國家の利益にも相成り候大業を起し、親の名までも揚げて、醉生夢死の者にはなるまじと、直ぐに思ひ付き候者にて、此れ即ち、志の發する所なり。志を立てるときは、此の心の向ふ所を吃度相定め、一度、右の如く思ひ詰め候へば、彌々切に、其の向きを立て、常々、其の御心持を失はぬ様に持ちこたへ候事にて候。」「橋本左内」

志す所があつて、或る事がある。人間、無爲に終る心組ならば左に右、何事かを成し、何者にならうといふには、先づ以て、志を立てなければならぬ。孔子も、

吾れ、十有五にして、學に志し……七十にして、心の欲する所に従つて、